

194-U42-3ウ



1200500728824

初 村正久著

植村傳道叢書

5

新教出版社



始



194

U42

3

植村正久著

祈

傳道叢書

5

東京新教出版社刊行



目次

一、祈の研究……………	三
二、主の祈……………	二八
三、祈の生活……………	六〇

一、祈の研究

宗教は神と人との友誼である。すべて朋友の間柄は對面、音信、交歡、訪問、談話、などに始まり、維持せられ、また増進せらるゝものである。ばくぜんと心に思ふ位では足りぬ。それが形に發し何かの事實となつて表れねばならぬ。しかしてわづかに最初の一回にて止むべきで無い。機會を得、またこれを求めて、しばしばくり返すことが必要である。互ひに忘れぬ様にする。訪ひも訪はれもする。空飛ぶ鳥の翼にまで音づれを託するに至る。これがためにはあらゆる工夫と努力とををしまぬ。「人の相識るは心を相識る」を尙ぶとは申しながら、あまり精神的ならんことを氣取つて、これを口實に油斷をすると、つひに疎遠に流れてしまふ。

神と人との關係も同じことである。心の誠がおもてに現はれて祈とはなる。すなはち齋み宣るの義、神に向つて信仰的の談話を試みることである。靈なる生命が發露して、神と思ひを交へ、情感を通はせ志を述ぶることが祈である。獨語するのでは無い。餘念なく會話するにある。その中には、神の徳を頌め讃ふことは勿論、重ね重ねの恩恵を感謝し、胸に滿つる懐ひを述べ、既往現在の罪

を告白懺悔し、その赦を求め、向上心をひれきし、過を改めて正義に遷るの意志を表明し、ひたすら上よりの護りと助けとを哀願して息まぬ。祈の内容は人の心と共にはなはだ入り組む、極めて多方面である。

舊約聖書詩篇の第百四篇に、「若き獅子ほえて餌を求め、神に食物を求む」(二二)とある。人より下の動物にも反哺のごとき関係がある。求めてこれに應じ、饑えて助けを他に求むるの道が行はれる。人とこれら動物との間に至ると一層明かである。ある書物の名を「人の友」と云ふのがあつた。内容は犬のことを説いたものだ。兩者の間に不備ながら祈の如きものがある。ペエコンがかつて、「人は犬の神なり」と云つたさうだが、いかにも道理至極である。虎の威をかる狐のみでなく、「主人につれられて勇氣百倍、威勢傍輩を壓する」犬もある。彼らは「神の子たちの現れんことを待ち」(ロマ書八・一八)これに追隨してその「光榮の自由に入らんこと」を願うて居る。(ロマ書八・二一)

人と人との間にはもとよりこの関係が更に親密で、少しも疑をいれぬ。社會はすべて祈の關係である。と云つても好い。「人獨りなるは善からず」(創世記二・一八)呼びつ應へつ、助け助けらるゝがその正則の状態である。親子、夫婦、兄弟、姉妹、主僕、師弟、朋友、さては商賣の關係に至るまで、ことごとくこの理にほかならぬ。まさにイエスの譬へられた如くである。「なんぢらの中たれか友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。わが友、旅より來りし

に、之に供ふべき物なし」と言ふ時、かれ内より答へて「われを煩はすな、戸ははや閉ぢ、子らはいと我と共に臥所ふしどにあり、起ちて與へ難し」といふ事ありとも、われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて與へねど、求めの切なるにより、起きて其の要する程のものを與へん。われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば與へられん、尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん……」(ルカ傳一一・五―九)人間の關係はしばしば輕薄に流れやすい。その助け助けらるゝ愛の行動も、時としては友情よりも低き他の動機に支配せられ、その間にあまり感心の出來ぬ精神もばくらする。イエスの譬は實に人情の有りのまゝを寫された。しかしそれを段階として神と人との間に行はるべき祈に説き及ぼされた如く、禽獸人類が皆かくの如くならば、神と人との間には、これにも優るべき美妙なる關係の成立し居るべき筈であると云はねばなるまい。青々と茂りたる樹を見れば、實を期待して、心もせかれつゝこれに近寄らんとするが如く、日でりに雨を天に訴へ窮厄に際して神明の加護冥助をからんとするは自然の人情である。

古今の偉人はその才徳の高きほどますます天に負ふ所多きを自覺して居る。故にこれを天才と云ふ。彼らは「思これをおもひ之これをおもひ之これをおもひ、又重思これをおもひ之これをおもひ、思これをおもひ之これをおもひ而不これをおもひ通これをおもひ、神將これをおもひ通これをおもひ之これをおもひ」と信じた人たちである。ジョン・ブラウンと云ふ學者がかつて人の中にはソウラル・マン(太陽勢下の人)なる一種の傑物のあることを説いた。すなはち地上の關係に由りて成立せず、天上の關係から偉大なることを得た連中である。西哲ソクラテスが神明の啓發を頼みにして居たことは、みな人の熟知する所である。

ピタゴラスは幾何學の發見に歡喜おく所を知らず、取るものも取りあへず己れを啓發してこゝに至らしめた神に、感謝の供物を捧げたと云ふ。人々がハイドンの天才を稱讃した時、彼自身は天を指して、「我の力にあらず、我の力にあらず、たゞ神より來れり」と叫んだ。殊にイスラエル民族の豫言者に至りてはこの確信と自覺とがきは立ちて明確であつた。彼らは「エホバの言我に臨む」
「かくの如くエホバ云ふ」と常に語つて居た。後回に機會を得て説く如くイエスは祈の人であつた。ヨルダン河に於てバプテスマを受けられ祈りつゝありし間に、天よりの聲を聞き、神の靈これに降りてその上に住するを實見せられた。(ルカ傳四・二一―二二) その一生の大事はすべて祈に由つて決せられ、またその間に得たる力を以て行はれた。祈を以て開始せられたるその事業は、十字架上またこれを以てその局を結んだ。(ルカ傳二三・四六) 何人といへどもイエスとその性行とに親しむならば、祈が活ける慕はしき事實と勢力であることを感ぜずには居られない。我もかくありたいと望むに至るであらう。

天の言はず人をして言はしむ。「語らずいはずその聲聞えざるに、そのひゞきは全地にあまねし」。(詩篇一九・三一―四) 「エホバの御聲は水の上にあり榮光の神は雷をとどろかせ給ふ。エホバは大水の上に在り。エホバの御聲は力あり。エホバの聲は稜威あり」。(詩篇二九・三一―四) さればこれを神鳴りと云ふもその筈だ。支那の聖人が迅雷風烈その色を變すと云うたのも、自ら神に接するの感想を禁ずることを得なんだからで有るまいか。「エホバよ汝は我を探り我を知り給へり。汝

は我が坐るをも立つをも知りまた遠くより我が念をわきまへ給ふ。汝は我が歩むをも我が臥すをも探り出し、我がもろもろの途を悉く知り給へり。そは我が舌に一言ありとも、視よエホバよなんぢ悉く知り給ふ。汝は前より後より我をかこみ、我が上にその御手を置き給へり」。(詩篇一三九・一―五) 「我れ何所に往きて汝の聖靈を離れんや。我れ何所に往きて汝の御前を免れんや」。(詩篇一三九・七) 神の前にては暗も物を隠すことなく、夜も晝の如くに輝く。神の眼光は人の肺腑をも貫く。かくては如何しても神の前に罪を認め、その赦しを得んことを願はずには濟まぬ。またこれに向つて、「神よ願はくは我を探りて我が心を知り、我を試みて我がもろもろのおもひを知り給へ。願くは我に邪なる途の有りや無しやを見て我を永遠の道に導き給へ」。(詩篇一三九・二三―二四) と祈るのが自然の順序となる。のみならずイエスに伴はれ、これに紹介せられて、彼の父また我らの父なる神を拜する時は、祈が自ら起らねばならぬ。神は人格的で自由で、社交的で、我らの父であつて、常に我らに語り、教へ、諭し、警め、慰め、奨め、責め、また宣告を下される。かく自覺したならば、これにふさはしき答をなし、かつ嘆き、かつ喜び、かつ謝し、かつ求むることが、最も自然なるわざである。要はみな如何なる性質の神を認むるかと云ふ一點に歸着する。

祈ることをちゆうちよしたり、これに反對したりするのは、上に説いた如く神を認めないからである。疑ひは神を誤解するより生ずる。アウグスチヌス曰く、「我が誤りは我が神に在り」と。すなはち、すべての誤解は神を誤解するに起因する、と云ふ眞理を高調した言である。自然界に於

て、道念の作用に於て、神をこがれ求むる靈性に於て、人類の宗教意識に於て、取り分けイエス・キリストの人格とその意識に於て、在天の父なる神を認識するならば、祈らずして止むことの出来ぬ様になる。結局、神を愛するの念の止み難き所から祈を爲ねばならぬことになるのだ。バビロン王ダリウスの臣下王をそのかして曰く「今より三十日の内はたゞ汝にのみ願ひ事をなさしめ、若し汝をおきて神または人にこれを爲す者あらばすべて獅子の穴に投入れんと云ふ是なり。されば王よ願くはその禁令を立て、そのみことのりを認めメデヤとペルシヤのすたること無き律法のごとくこれをして變らざらしめ給へと。王すなはちみことのりを認めてその禁令を出せり」。(ダニエル書六・七一九)されどもバビロン王の朝にダニエルが居た。彼はこのみことのりの「出でたるを知りて家に歸りけるが、その二階の窓のエルサレムに向ひて開ける所にて一日に二度づつ膝をかゞめて禱りその神に向ひて感謝せり。これその時の前よりしてかくなし居たればなり」。(ダニエル書六・一〇)詔書も、王の逆鱗も、獅子の穴も、ダニエルの心を奪ひ、その習慣をすてしむることを得なかつた。實に「我心匪石不可轉也、我心匪席不可卷也」であつた。見るべし、祈りはかくの如く深く人の心に根ざす。その必要は饑渴よりも甚だしい。何物もこれを人間より奪ひ去ることは出来ぬ。

二 イエスの祈 上

「イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子の一人いふ、「主よヨハネの其の弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ」。(ルカ傳一一・一)彼らはイエスの祈らるるさまの如何にも貴く覺えて、自分らも日ごろ祈らないではないが、少しも成つて居らぬかの如くに感ぜられて、更に修養せねばならぬを悟つてかくは申し出たのである。我らもしか致したきものである。實に主は祈の人であつた。その教訓の中、祈に關するものがすこぶる多く、所説高妙深遠、至れり盡せり、その祈禱論の偉大なるを感ずることであるが、その實生活は口に言はれた所と異らず、祈に於てはなほ偉大なるものであつた。傳へ聞く、ルーテルは一日に約三時間を祈に費したと云ふが、イエスの生涯も祈を以て見たされたものであつた。「キリストは肉體にて在ししとき、大なる叫と涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを獻げ、そのうやうやしきによりて聽かれ給へり」。(ヘブル書五・七)その祈の状態をしのばるゝ心地がする。熱切燃ゆるが如く、一語一涙神に迫るの趣きあると同時に、少しも敬畏の態度を失ふことなく、靈的調和の妙、得も言はれぬものがある。

イエスの一日は常に祈をもつて始まつた。「朝まだき暗き程に、イエス起き出で、寂しき處にゆき、其處にて祈りたまふ」。(マルコ傳一・三五)昨日は終日はなほ多事にして、ほとんど寸暇をも餘さず、疲勞も思ひやられたるに拘らず、朝つとめて起き出で、特に人無き所にまで行いで、祈られたのである。一年のことは元日にあり。一日のことは朝にあり。朝の祈は人の生活に大

なる關係がある。社會哲學の創立者とも稱すべき佛國のコムトは基督者でなく、神に祈する人で無かつたが、毎朝從者がこれを呼び醒ますとき、聲高かに「コムト君、記憶せられよ、君は爲すべきの大事あるなり」と言はしめたとか云ふことである。基督者は神の前に於て、コムトに勝りたる準備をととのへ、心を引きしめて、一日の門出を爲すことが出来るのである。

朝は元氣も好く、事業我を促すものの如く、自ら精神を引き立てらるゝ心地して、祈にも氣の進むべきが當然である。兒玉大將の如き信仰に縁遠い人でも、大戦を前に控へて居つたときは、朝つとめて太陽を仰ぎ、祈念をこらしたと云ふではないか。朝の祈はほとんど自然に出づる。基督者で無くとも朝拍手打つて、何かは知らぬが拜むものあるを多く見かける。しかしその割合に夕の拜みを爲すものは、事實に於て少からうと思はれる。始め有りて終り無きが世の習ひ、苦しいときの神頼みも、喉もと過ぐれば熱さ忘るゝとやら、とかく神の前に夕の勤めは怠りやすい。それに晝の疲れもあり、氣も沈みがちで、失望などの有つた場合にはなほさら、祈に氣乗りせぬ様になりやすい。だから夕の祈に精神のこもる様になつて、その習慣が立派に持續するは修養の結果でなければ出来ぬ。たゞ神の恩寵によつて、行はるべきことである。基督者は夕の祈に心を用ひねばならぬ。努力を要する。夜神に祈つて向上心を振ひ起し、志をたんれんすることを努めるならば、その効果は朝の精神状態に現はれ、その影響はすべての方面にいちじるしく爲るであらう。吾人は寢床にたづさへ行く心持そのまゝで朝起き出づるものと見なして差しつかへあるまい。そこでイエスのこと

を顧るに、「群衆に別れてのち祈らんとて山にゆき給ふ」。(マルコ傳六・四六)その一日は祈を以て終結されたのである。基督者の心すべきことである。

またよもすがら祈られたといふ記事もある。「その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつゝ夜を明したまふ」。(ルカ傳六・一二)主はしばしば祈に夜を明かされたのである。

朝と夜のみならず、その間にも祈があつた。實に詩篇の第五篇一七節に見ゆるが如くである。

「夕にあしたに晝にわれ歎き且かなしみうめかん。エホバわが聲を聞き給ふべし」。

無論一人して祈られた。「イエス寂しき處に退きて祈り給ふ」。(ルカ傳五・一六)かつて「祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ」。(マタイ傳六・六)と教へられし如くである。法然上人の如きも念佛に深く心を用ひ、公にこれを唱ふるのみならず、一人として爲すことをつとめた様だ。かつてその弟子僧の教阿彌なるものに授けた面白い教訓がある。彼はもと盜賊であつたが、法然の説教に悔悟して心も圓い僧侶となつた。まさに故郷なる相模に歸り住まんとするに臨み、法然の一言を授かり生涯の記念に供へんと言ひ出でた。法然はこれに念佛の法を示し「早い話が泥棒ぢや。他人の實に思をかけて忘るゝ間とては無けれども平氣な顔して少しも人に氣付かれぬ様しむける。この盗み心は全く他人に知られぬば飾らぬと申してよい。決定往生けつぎやうじやうの心もこれで、その時の念佛は佛様の外は誰も御存じない」。彼は他人にかく教へたのみならず、自らこれを實行した。教阿彌がある夜深更ふと目を覺ました所、上人がしきりに念佛するを聞きしこと

があつたと云ふ。

「二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」。(マタイ傳一八・二〇)多くの人の心を合せてする祈は驚くべき勢力がある。ペンテコステの如きその實例の一つだ。心理學上から見ても、かくあるべき筈である。加ふるに吾人は社交的のものである故、感謝、懺悔、祈願は又社交的で無くば道理にかなはぬ。基督者は社交的の祈を行はねばならぬ。故にイエスがしばしば衆と共に祈られたるを見るのである。

「シモン、シモン、視よサタン汝らを麥の如くふるはんとて請ひ得たり、然れど我なんちの爲にその信仰の失せぬやうに祈りたり」。(ルカ傳二二・三十一―三二)これはイエスが他人のために祈られた例である。十字架上の祈もそれである。ヨハネ傳十七章の如きその最もいちじるしき實例である。「人もしその兄弟の死に至らぬ罪を犯すを見れば、神に求むべし。さらば彼に、死に至らぬ罪を犯す人々に生命を與へ給はん」。(ヨハネ第壹書五・一六)祈つて他人に生命を與ふべしとある。他人のために祈るの權能また大なるかな。基督者の生活は、代りて祈るものであるべき筈だ。他人の幸ひを感謝しその罪惡を悲しみ、その必要に同情を寄せて祈ることを怠つてはならぬ。

主イエスの祈られたうちに、古人の成句をそのまま踏襲せられたものが、少くない。例へば十字架の上に「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」。(マルコ傳一六・三四)と祈られたのは、詩篇の第二二篇の一節を引用せられたのである。また「大聲に呼はりて言ひ給ふ、「父よ、わが靈

を御手にゆだね」(ルカ傳二三・四六)とあるは、詩篇第三一篇の五節より出で、ヘブライ民族の習はしとして、母が毎夜その子を眠りにつかしむるとき、傍にありて彼がために唱ふる詩の一節である。イエスが十字架上に於て之を唱へられしはその心が思ひやられて、味ひきはまり無きを覺える。主は成文の祈りを用ふることを恥とせられなかつた。基督者の祈が、もしイエスのその如く聖書の祈の詞や、古聖徒のたれんした祈禱文をも用ふるに至らば、多くの弊をため、その精神をさらに高尚ならしめ、その内容を豊富ならしむるであらうと思はれる。

三 イエスの祈 下

「イエス答へて言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給ふことを見て行ふほかは自ら何事をも爲し得ず、父のなし給ふことは子もまた同じく爲すなり。父は子を愛してその爲す所をことごとく子に示したまふ。また更に大なる業を示し給はん、汝等をして怪しましめん爲なり。父の死にし者を起して活し給ふごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。……これ父みづから生命を有ち給ふごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、また人の子たるに因りて審判する權を與へ給ひしなり。……我みづから何事もなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我がこゝろを求めずして、我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る」」。(ヨハネ傳五・一九―

この數節はイエスの生涯に互れる精神を遺憾なく發揮して居る。何事を爲すにも、すべての點に於てその態度方針、手段歸趨ともに、神の意旨と接觸を保ち、調和を維持し、全然協同して居られた。兩者の間に完全なる一致が成立し、また繼續せられた。そのヨルダン河に、ヨハネよりバプテスマを受け、祈つて居られたとき天たちまち開け、聖靈その上に降り、「天より聲あり、汝は我が愛しむ子なり、我なんちを悦ぶ」(ルカ傳二二・二三)とこれに告げた。この繪の如き事實を解釋すれば、主はこのをり神の幽妙なる聖意に洞通し、神と自己との關係を認むることいよいよ深く天來の啓動威力がその上加はつたものである。かくなられた元はと云へば、聖書の本文にも見ゆるが如く、祈である。「祈り給ふ時」とあるが即ちそれである。常々祈に由つて天に在るその聖なる父と思はせ、事をはかり、人と事物とにつきて正しき見解を得、あらゆる場合に於て神の期待しかつ望を寄せらるゝ所いづこにあるかを明に見、かくて何事によらずこれを成し遂ぐるの用意全く備はり、たいぜんとして召しに應ずることを得られたのである。

かくの如く常に祈られて神と最も美しき一致を保てるイエスはこの人にしてこの事ありで、最もよく徹底せる祈の教をも世にのこされた。「汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ魚を求めんに蛇を與へんや。然らば汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はさらんや」(マタイ傳七・九一一)實に祈りは子の父に於ける如くあるべきである。「また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言をくり反すな、彼

らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。さらば彼らに效ふな、汝らの父は求めぬさきに汝らの必要なる物を知りたまふ」(マタイ傳六・七、八)神は我らの祈を鼓吹し、誘掖し、また喚起せられる。ロマ書に聖靈言ひ難きの歎きを以て我らの爲に祈るとあるも、つまりは祈ることも知らぬ人の心に祈を促してこれを喚び起さるゝことを示したのである。子は親に謝辭を述べること辭儀することをも知らぬ。親がこれを教ふるのである。然るにこれを教へたる親は、その云はしめ爲さしめたことを喜び受けて、世にもあはれ目出度きことと思ふのである。神と人との間にもまたかくの如き關係のあるやうに思はれる。すでに然らば神は人の願はざる先に、その無くてならぬものを知られ居る筈である。あるひはこれを口實として祈るべき必要なと思ひひがむものも有るかも知れぬ。大方の人はかく主張したい下心があるかも知れぬ。しかしイエスはこれとは反對で、神知らざる所無しと云ふのが、その祈心を鼓吹する動機であつた。心一つで、同じ物も結果がかくまで違ふ。同じ給でも孝子には親を養ふために用ひられ、盜人には窃盜を働く手段を供給した。元來祈は吾人の必要に無頓着で、あまりこれに心付かざる神の注意を喚起すべき手段では無い。こちらの必要を熟知し、我が最も高尚なる利益を御心にかけてさせられ、同情至らざる所無き神に信頼し、その聖旨に添ふことを念じ、これに従ふことを志して神の與へんとせらるゝ恩寵に沐浴するの準備を整へ、これにふさはしき態度を具ふる所以である。かくの如き準備有るものと無きものとの間に祝福につきての相違あるべきは當然である。兩者に何の區別無しと云ふならば、それこそ世の中はとこやみと云

はねばならぬ。全く玉石こんこうである。人間同士でも心ある親は子の必要を知りつゝも、その精神的準備が成つて、それが熱誠をこめた懇ろなる願ひとなるまでは、空しくこれをもだし置く場合も少くない。みだりに與へては大害をかもすであらう。

主の祈(マタイ傳六・九一―一三参照)を見るに「御名の崇められん事を」より始つて「惡より救ひ出したまへ」に終る。事の輕重、公私の別、一糸亂れず、その次第がはなはだ嚴重である。身體は衣より、靈魂は身體よりも重大である。故に「身を殺して、靈魂を殺し得ぬ者どもを懼るな」。(マタイ傳一〇・二八)「人、全世界をもうくとも己が生命を損せば、何の益あらん」(同一六・二六)と云つてあるのだ。祈もこの順序に従はねばならぬ。たとへば日用の糧を今日も與へ給へと求むるは、その前の願ひなる御國を來らせ給へに附隨してのことで、それが爲の要求から生ずる日用の糧は御國の爲であるから、時と場合によりては、これが爲に飢うることも可なりと覺悟せねばならぬ。とかくこの次第を立てぬのが多くの祈の缺點である。

「また彼らにきおちせずして常に祈るべきことを、譬にて語り言ひ給ふ、「或町に神を畏れず、人を顧みぬ裁判人あり。その町に寡婦ありて」云々。(ルカ傳一八・一一八)寡婦の熱切にしてたわまさる願ひは、神を畏れず、人を敬はざる裁判官をも動かした。いはんや神に於てをやである。その御心に従ふ祈に答へられざる道理は無からう。イエスはかくの如く祈の熱烈、懇到、痛切なるべきを教へられた。

「なんぢらの仇を愛し汝らを憎む者を善くし、汝らを誣ふ者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ」(ルカ傳六・二七、二八)。シモン・ペテロを始め人の爲に祈られたイエスは敵の爲に祈ることをその弟子に要求せられた。基督者の祈にはこの分子を缺いてはならぬ。十字架上「父よ、彼らを赦し給へ」と祈られたがその模範である。(ルカ傳二三・三四)

「誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし。……汝らが我が名によりて願ふことは我みな之を爲さん、父、子によりて榮光を受け給はんためなり。何事にても我が名によりて我に願はば、我これを成すべし」。(ヨハネ傳一四・一二―一四)これまさしくその世に在りし時自ら神より賜りたるよりも大なるものを期待してこれを望むべく奨勵せられたのである。その前後の聯絡文を按ずるに、イエスがその折に爲し居られたことは、民の疾病艱苦を救ふいはゆる慈善事業の種類であつた。弟子らまたこれを行ひ得べきのみならず、これよりも大なることを心がけ、主の名に於てこれを祈るべきことを命ぜられた。しかしてさらに大なることは何であるか。言ふまでも無くペンテコステの如きを指すのである。すなはち靈的の事業である。これ我らの最も熱切に祈り求むべきことである。

主はその名に於て祈ることを教へられた。イエスの名に於て祈るとは、我らがその使者として、その任命を帯び、その許しを頭にいたゞき、その誘引と指導とによりて願ひ事を捧ぐるのである。イエスの名によりと云へば、もとよりイエス自身の事業とその御國との爲めに祈る外は有るまじき

管である。ゆめ、いやしき私情をたくましようする様なことがあつてはならぬ。要するに御心のまゝに爲し給へといふ意味である。

四 祈りの培養とその効果 上

佛教に數珠功德經と云ふのがある。數珠をつまぐるならば、「自ら利し他人を護り、速に諸法を成し、しかも驗を得ること多くその福ひ無量算計すべからず、校量すべきこと難し」と説いて居る。他山の石、いさゝか参考ともなる。つまり心の散逸するを防ぎ、雜念を除き、精神を統一する方法なりと見える。その用意周到である。基督者にはかくの如き機械的手段を用ひたり、流行の深呼吸を行つたりする必要は無いが、祈らんと欲するものは、氣を静め心を落着け、神をひたすらに念じ、志と力とを一つに集めねばならぬ。「風に動かされて翻る海の波のごとく」(ヤコブ書一・六)では仕様が無い。しかし時としては取り止めも無きそゞろ事がそこはかと無く、念頭に浮んで、祈の出来ぬやうに感ずる場合もある。道路は人馬往來繁く、關守もこれを制しかぬるばかりの有様である。イエスは「なんぢは祈るとき、己が室に入り、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ」(マタイ傳六・六)と云はれたがそこが難しい。窃盜が我が家に入り込むのだから困る。かゝる場合にはみだりに闖入し來るやつばらを捉へて直ちに祈の題目とするが好い。たとへば若し世の思ひ煩ひが胸にはびこつて祈り心になれぬを覺えるならば、それを神に投げかけて、その煩ひより救

はれんことを祈るのである。何事か嬉しくて氣も浮き立つ場合には、直ちにこれを感謝すべきである。難事には、神に呼び求め、堪へ難き試煉には、これを天の父に訴へよ。下向きになつて、内省的に己が念慮を整理せんと試みるよりは、むしろ神を見上げその御すがたに心を凝集するやうに努むる。自己の思ひを省りみ、祈りのことば遣ひなどに屈託するよりも、神の意志をうかゞうて、その愛、義、恩寵、人の返ることを待たれる御有様などと、こちらの思ひとが全然往き通ふやうになり、神の心と共に胸が鼓動するやうになるならば、熱誠我を忘るゝばかり燃ゆるやうな祈りが自然口からほとばしり出づるであらう。

聖アウグスチヌスは使徒信條を直ちに引き直して、祈にしたといふ。實に面白い方法である。これを順に祈つてゆくなら讚美も、懺悔も、感謝も、赦罪もこもこも溢れ出づべき道理である。聖徒の交り、聖なる公同教會の條に至つては同情が古にさかのぼり、後にまで及ぶ。我を忘れて羽化登仙すとも云つた様になり、隠れたる別世界に遊ぶ心地して、聖き感想や、これに伴ふ高尚なる祈りが湧き上るに相違ない。とかく己れのことのみに局限せられ易き注意を隣りや友にまで延長し、彼らの爲に善き祈をせねばならぬ。聖徒の交り、聖なる公同教會を思ふときはこの難しい祈も出來易くなるのである。ある人がこれを名づけて、「膝折り敷きつゝ人を愛することなり」と云つた如く、人の身の上を祈に念することは愛の美しい現れである。またこれを刺戟し、これを振作する力である。

祈のうちにも感謝と云ふことは比較的少く、また出来難いことである。しかし基督者には、かかる困難は無かるべき筈である。すでに罪もキリストによつて赦されたる以上、煩悶苦痛の材料が、取りも直さず涙ながらの感謝となり得るではないか。つらい災も冷水摩擦の如く吾々のためになるから、考へ方次第では感謝することも出来る。故に『凡てのこと感謝せよ』(テサロニケ前書五・一八)『凡ての事に就きて常に我らの主イエス・キリストの名によりて父なる神に感謝せよ』(エペソ書五・二〇)ことに己が救はれたる恩寵を思ふに至つては、如何なる境遇にあつても感謝の出来べき筈である。たゞ一身上のこと許りではない。朋友のことに就いても、その好意、善行、利達、祝福などを思ひやつて、これを感謝するのが當然である。真正の友情と云ふものは、かゝる感謝のうちにも最も美しき光を放つものだ。現在生きながらへる人ばかりではない。死者のことに就ても感謝するのが基督者の志であるべき筈である。その世にあると亡きとを問はず、すべて朋友の品性やその敬愛すべきすがたが、あるひは慕はしく、あるひは懐かしく、基督者の感謝のうちには彷彿として目の前に映じて来る。山里の獨り住居もかくては寂しく感じないのである。常に温情こまやかなる家庭の心地がするではないか。

『エホバの御手は短くして救ひ得ざるにあらず、その耳は鈍くして聞えざるにあらず、たゞ汝らと汝らのよこしまなる業、汝らと汝らの神との間を隔てたり。また汝らの罪、そのみかほを覆ひて聞えざらしめたり』。(イザヤ書五九・一二)罪惡をそのまゝに爲て置き、心を正うし志を誠にすること

もなく、不義なる習慣を除き去らうともせず、世ごころに充たされ、私情にかられ、肉慾におぼれたまゝで祈つたところで、何の力があらうか。基督者は悔い改め、心を潔め、義にうつるの志を鞏固にして神の前に立つべきである。曲れる祈には神も耳を傾けられない。決して非禮を受けさせられないのである。

そこで問題は祈に對する神の答、すなはちその効果に入つて來た。『心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん』とさかしげに詠じた人(しかしこれは昔公ではない)もあるが、一方には『心をば誠の道に入れおきて、祈らばなほも神や守らん』と詠んだ人もある。後者がむしろ穩當である。第一、基督者の祈はかくの如く現金主義なものでは無い。右から左とその効果を見込むやうでは、精神上殊勝な所が少しも見えぬ。吾人は神の賜よりも、神御自身が慕はしいのである。神に近づき、そのみすがたを拜し、その御旨をうかゞひ、その恩寵を味ひ得んとすることが最上の目的で無くてはならぬ。イエス『十二人を擧げたまふ。是かれらを御側におき……』(マルコ傳三・一四)とある。この『御側におく』と云ふが最も緊要なる點である。祈つて神と親しみ、これに同化せらるゝのが、祈の最も美しい効果である。加ふるに讚美、懺悔、感謝などについて、みだりにその効果の如何を問ふことの無理なことは云ふまでもあるまい。迷信を主とするまじなひや、加持祈禱ならばいざ知らず、基督者の祈に於ては、親子夫婦の間に算盤を持ち出すが如きことがあつては、はなはだ不似合ひである。吾人は神を信するが故に、また愛するが故に、祈らねばならぬ。し

かし祈にはある目的を立て、これを成就すべく神に訴へ求むる方面もあるから、その効果あるを信ぜねば、これを捧ぐる心にもならないのである。求めよ、尋ねよ、門を叩けよ、だが、これを得ることも、これに遇ふこともまた聽かるゝことも全く無しとあつては、到底出來ない話である。自由なる神の支配せらるゝ世界に、自由行動の行はれ得べき間に、自由なる人類が、見込を立て願をこめて、祈り求むべき餘地は充分である。その効果のあるべきも疑をいれぬ。この點につき近頃科學上の研究も次第に熟して來て、鑿々そのよりどころが明かになりつゝある。しかしこれは次に論ずることとして差し向き一言せねばならぬことがある。

頭是なき幼兒の親に求むることは、一々聽かるゝものでない。聽かれないことも間々あつてこそ、その幸福は全うせられるのだ。人の神に祈るも同じことである。決して一より十に至るまで、ことごとくその求むる如く成就することは無い。事の性質に於てすでにしか有るまじき筈であるのみで無い。もし祈が一々聽かれるとしたならば、眞正の信仰、と云ふものが、その跡をたつに至りはしないかを恐れるのである。すなはち、世はこぞつて報酬の爲に働く傭兵の如き教會員と化すべく、聖徒の教會はかへつて微々振はざるに至るであらう。そして眞正の信仰なきものも皆ことごとく修驗者の如く、山伏の如く祈禱を爲すに至るに違ひない。上よりの命令によつて一せいに國旗をかけ喪章を着ければとて、さうする人々にことごとく愛國忠君の精神ありとは認め難きと同様であるかも知れぬ。一せいの國旗掲揚やそろひの喪章と一樣なる祈は精神界に歡迎すべきもので無から

う。

五 祈りの培養とその効果 下

相談をしたり、何か物を頼んだりする場合にも、「然り」と云ふ答を必ず期待するは、先方を馬鹿にした話で、時としては「否」と云はるることが無ければならぬ。間々「否」とも「應」とも答へられぬことがあらうとも、これをあやしとはしないのだ。いづれにしても先方が思慮と同情との有る人であるならば、こちらの云ふことを聽かれたに違ひ無い。たゞその答が時としては「然り」であり、時としては「否」であり、また時としては沈黙であるのである。考のある活きた人のことであるから、固よりしかあるべき筈である。さうであるとすれば神に祈りを爲すに、いつも「然り」とのみ答へらるべきものと極めを付けてかゝるは、大なるひがごとである。

神は吾人の祈に同情を寄せ、善きやうに處置せらるべしと思ふなれば、「否」にも「應」にも、心を安んじ得べきである。パウロはその苦痛に堪へぬ事柄を三回も祈つたがその願つた如くには聽かれなかつたけれども、「わが恩恵めぐみなんちに足れり」と主は申されたと感じて、彼が期待したより外の、かつそれより好き方法を以て祈を聽き入れたまうたものと信じて疑はなかつた。(コリント後書一二・七―九)かくの如きことが多いから、すべて神に任せて祈らねばならぬ。

神はしばしば御聲もあさやかに、吾人の祈るところに答へられる。そして、これに對する思召が

明瞭に聽えるのである。舊約聖書には、「かくの如くエホバ云ふ」てふ句があまた出て居る。黙して神を思ひ、熱心に祈を爲す間に、神の御聲を聽いて、我が求むるところに對し「否」か「應」かの思召しが、分明に會得されるのである。しかし、呼べど何の答をも得ない場合もまた無きにしも有らずである。神はしばしば沈黙を以て、答へらるゝのである。其のばあひ、この沈黙が最も好き答であることを忘れてはならぬ。言はぬは言ふに勝る。しばしの沈黙、千言萬語よりも雄辯である。學者とパリサイ人が、姦淫を爲したる女を捉へ、これを曳き來つて、罵りわめいた時、「イエス身を屈め指にて地に物書き給ふ」とある。(ヨハネ傳八・一八) 法廷に於て主は祭司や役人の問ひに無言を以て答へられた。(マルコ傳一五・五) 沈黙が時に取つて妙味最も深き答辯であつた。こちらの願ふこと不當であるか、熱心を缺くか、願ひはしても、はなはだ無責任で、これが爲に己の爲すべきことを盡すの心もなきか、などの場合には沈黙の方が却つて祝福に充てる答である。たとへば親戚の救はれんことを祈つても、神は黙して御答なきかと疑はるゝ折もある。祈はするもの、彼を感化するに必要な手段にして己が力の及ぶもの多きに拘らず、これを等閑に付し去つて無責任にたゞ口を以て、時としては餘り價値なき感情一片の涙を以てのみ祈るに過ぎぬ有様であつたかも知れぬ。神の沈黙はこれを警告して、こちらで自ら爲すべきことを爲すを催促せらるゝものと解することも出来る。自らかせぐ力のある者に、その求むるまゝに金品を與ふるは、貧民を増加することになる。それで神も精神界に貧民の増加するを好ませられぬであらう。

神の答はしばしば事實に於て現はれる。こちらの求めた如く、あるひは他の形式に於て、いつしか事のすでに成就し居るのを見て、げにも、とうなづかされる事もある。いづれにしても神が祈に答へられたのである。ジェムス教授の言に「祈るときには今まで眠り居たる靈的勢力が活動を始めるので、必ず何らかの靈的作業が事實しとげらるゝに相違ない」とある。祈によつて上よりの勢力の通路を開き、あたかも鎖されたるせきを切つて水を流すが如き結果を見る。これが爲に人格を修練し、品性を高尚にし、精神の活力を増し、日常の生活に好き變化を來すは勿論、しばしばその容貌にまで一種の變化をもたらすことがある。肺に故障があつてばいきんにその生命を蠶食せらるゝ憂を懷くものは、太陽の光線や、清新なる大氣の中に移り、身をこれに浸して、その病毒を驅除することをとめる。獵人に追はるゝ鳥は、虚空高く舞ひあがり、着弾距離をかすめて、危険を免れるのである。人もまたかくの如くである。祈は吾人の精神的生活に非常なる關係をもつて居る。たゞこれらの範圍に屬することばかりでない。己が身の上、他人のことに就き、祈つて得べく、祈らでは得ずして止むべき多くの祝福がある。病などに至つても祈によつて大いなる効果が得られる。英國の科學者サア・オリバー・ロツヂは曰ふ「幼兒の如き態度を以て神に祈ることは、科學の方から見ても世界を支配する勢力の中に算へらるべきものである。祈は世界を指導し運轉する勢力の一つである」と。また八月のエクスポジトリ・タイムスに祈に關する一文章を見た。その中に科學世界に於ける祈に就いての傾向を指摘し、知的方面から見ても、祈は道理に合ふものであると論

じて居る。先頃英國に於て種々なる専門の學者が數名あつまり、前後十九回の委員會を重ね多くの證人を調査し、討論熟議を盡した結果、祈の病を癒すに大いなる效力あることを證明する報告書を世に公にした。わづかに五十六頁、小冊子ではあるが極めてまじめに、最も簡潔にこれを説明してゐる。題して『スピリチュアル・ヒーリング』と云ふ。マクミラン會社の出版だ。ジェムス教授曰く『醫學上の事實から云へば、病人の爲になす祈は多くの場合に於て、その恢復のためになる。療法學の手段としてもこれを奨励すべきである』と。基督者ならざる心理學者も科學的研究のすゑかくの如く斷言するを憚らぬ。それもその筈である。なるほど自然の法則は定つて居る。因果の應報は必然である。しかし我々は他人に訴へてある事柄を成就し、ある目的を達する。しかせざれば、これ無くして止むのである。頼むべき醫者を頼まずして病が重り、これを頼んでその癒ゆることのあるは、人の熟知する所である。人間同士に於てはすでにかくの如くである。天地の主、萬物の造り主たる神に訴へるも訴へざるも、何の相違なしと云ふべき道理があるべきではない。世界には祈りの効果をいふ餘地が充分にある。決して窮屈に考ふべきことでない。

そこでも一寸云つたエクスポジトリ・タイムスに、『今や祈りは靈魂の最も熱烈なる作用である』と云ふことを基督者は廣く認めて來た。現今ほど祈が多く語られ、また熱心に實行せらるゝに至つたことは古今ほとんど未曾有である。一定の事柄につき、他人に代つて祈るのを目的とする祈禱團が至る所に起りつゝある。祈禱に於ける新たなる信仰、教會の中に勃興し、祈禱に伴ふ期待が

はなはだ熱烈である』とフレデリック・ジェ・レイ氏は云つた。確かにこれが精神界目下の趨勢である。

祈は神と親しみを厚うし、靈的修練を積む所以であるのみならず、これによつて、あるものを與へられ、ある出來事を來らせ、それ無しには得難き結果を見る所以の活力である。『多くの人の等閑にしつゝある一大活力は誠實に思慮深く祈る人の心と口とに近く横はつて居る。これを用ひざるが爲に世界は非常なる損失を免れない』。

家庭夏期學校講演（一九一四年八月）

二、主の祈

一 發端

イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子の一人いふ「主よ、ヨハネの其の弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ」。(ルカ傳一一・一)

イエスの生涯を見ると、その常例として行はれたことのうち、ことに禮拜に關して注意すべきことが多くある。

第一、ルカ傳を見ると、幼いとき両親に伴はれて都エルサレムに上り、宮の祭に參詣せられたことが書いてある。これはイエスの家族的宗教の模様を示すものである。第二は、家庭禮拜のことであるが、イエスの家庭には禮拜がよく行はれて居つたであらう。宗教は個人的の方面のみでなく家族こそつてこれを重んずべきである。イエスは幼少のときから父母に導かれて信仰生活の習慣をもつて居られた。我が邦の基督者の家庭にも、近頃やや家庭禮拜を重んずる風の興つて來たことは感謝すべきであるが、なほ進歩すべき餘地の多く存するを認める。この點イエスの家庭に鑑みて啓發されるが多からう。第三、イエスは幼時親たちに連れられて、いつも公會の禮拜に列席された

のみならず、年長じて世に活動せらるゝに至つても、なほ安息日には例の如くナザレの會堂に參會せられた。その親にも伴はれず、自ら主動的に、多分弟子どもを引き連れて行かれたのであらう。一體ユダヤ人の禮拜は不完全なもので、イエスのこれに出席せられたが不思議に思はるゝ位である。この事實によりて一所に集つて禮拜することの如何に大切なるかを知ることが出来る。己が信仰の精神的なるを口實として、みだりに公會の禮拜を輕んじ、はなはだしきはこれに列する者をさへ嘲る者と比ぶれば、雲泥の差別である。第四、生涯の轉機に當り、大事を決せらるゝ場合に於ては特に祈禱に心をも力をも入れられたやうである。例へば十二使徒を選抜せられたときの如きそれは、第五、更に進んで、そのゆくへの雲行たゞならず、今にも一大事の起らんとする場合に臨み、イエスは夜な夜なオリヴ山上靜かなる所を選んで祈禱のために往かれたやうに思はれる。すなはち靜かに清らかな自然界のうち、我が身、人の上、様々のことを思ひめぐらして祈られたのであらう。かくの如く如何なる場合に於ても祈られたに違ひないが、特に好んで、ある時ある場所を選び、祈をせられたものらしい。信仰篤きスコットランドのレエトンはアルラン・ウオリアと云ふ河のほとりで、神のことを考へ、また祈禱を捧ぐることを常とし、ジョナサン・エドワルヅもハドソン河の岸邊を歩みながら祈るのが習慣であつたと云はれてゐる。我らは必ずしも河のほとりや、山の中に行くを要せぬ。しかしあるひは會堂に於て、あるひは机に對して端坐するときなど、そこへ行けば自づと祈禱の湧き出づるほど平生の習慣が熟して居るやうでありたい。時間のこともまた

然りである。ユダヤ人は一日に三たび祈るのが習慣であつた。必ずしも一日三度と杓子定規に定める必要もなからうが、朝夕それぞれ適當な祈禱時間を定め、これを習慣とすることは大切である。我らの主はこれらの事をすべてその習慣として幼少より祈禱に親しまれたのである。

イエスの一生は祈禱を以て一貫して居る。たゞに口を以て祈禱を教へしのみならず、平生の行爲日常の様子がすでに祈禱を以て満ちて居つたがために、これに接近する弟子たちは、自分の祈禱の幼稚なるを感じ、現状に不満を感じ、さてこそ「我らにも祈ることを教へたまへ」と願つたのであらう。すなはちイエスの弟子たちは言を以て教へられたのみならず、その日毎の生活を見聞する間にいつもその祈禱に深く刺戟せられたのである。

プロゾル・ロオレンスの『ゼ・プラクチス・オブ・ゼ・プレゼンス・オブ・ゴッド』は神とともに在ると云ふ氣風の修業を積み、その習慣を鍛へ上ぐることを書いたものであるが、イエスの生涯は神とともに在るの生活に最も熟した模様である。常に神とともに在ると云ふ意識があさやかであつた。何人もイエスに接すれば父なる神との間柄きはめて親密であることを感ぜずには居られなかつた。ヨハネ傳第一章二二節に「されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給ふとも、神は與へ給はん」とマルタの言つたことが記してある。天父の心とイエスの心と親しく相通ふことは何人にも明かに見えたのである。お互の間に於ても何人かに物を頼み込まんと思ふ場合に、その近親者にしてこの人さへ受け合つてくれるならば事必ず成ると思はるゝ人物がしばしばある。マルタは天父

とイエスとの間柄がほゞその様に見えたのであらう。昔ヤコブはベテルに於て天の橋立に天使の昇り降りするを夢みた。しかしイエスの身近に侍つた人々はつねに白晝彼の上に、またその周圍に、天に達する梯とこれに昇り降りする天の使とを見た。あたかも吾人子供の時分、親が語り合ふ傍に坐してその話に耳を傾けたやうに、彼らはイエスの日常生活に接觸して、おのづから神の現在およびイエスと神との關係を手取る如く感知し得たのである。

かくの如く我らもまた日タイエスの生涯を考へ、思をひそめて、その深き信仰生活の状態に接觸せねばならぬ。しかしこれと同時にある形式を以て、あるひは特にすがたを改めて、神に祈ることも大切である。ある人々の如くみだりに形式を罵ることは大なる心得違ひである。イエスは世間の凡夫と同じく形式に従はれた。我らは自ら凡夫以上であるかの如く高尚を氣取るはよろしくない。これを要するに、イエスはその變化多き生涯を通じてつねに祈禱せられた。弟子を選ぶときにも、敵にわたさるゝ時にも、つひに十字架上に於て敵の爲に祈られしに至るまで、その生涯は祈禱の生涯である。すなはち形に於て、また精神に於て、祈禱の完全な雛形を示して我らに教へられた。そのがんちく多き教を懇ろに學ぶならば我らの信仰生活に益する處必ず多かるべきを信する。

二 天に在す我らの父よ

「イエス言ひ給ふ「なんぢら祈るときに斯く言へ、天にいます我らの父よ」。(ルカ傳一一・二、

マシウ・ヘンリの書いた聖書の註解がある。ずるぶん古くさい、また時々をかしい様なこともあるが、しかし大體は信仰的で、處々驚くべきほど意味深く説き明してある。彼れ主の祈を説明して曰く、要するにこれは一つの手紙である。神にあて差し出す手紙はかく認むべきものぞと、その書きぶりを示したものである。すなはち先づ所書き、次に宛名、用向き、最後に（これは嚴密に云へば主の祈の中に加ふべきものではないが）「國と權と榮は窮り無く汝のものなればなり」と云ふのが結尾の恐惶謹言に相當する。それから日附けであるが、これは「我らの日用の糧を今日も與へ給へ」と云ふ今日と云ふのがそれであつて、アマメンはメ、封緘であると。如何にも單純であり、また少しをかしみもあるが中々適切で面白い説明である。主の祈には手紙の要素が皆そろつて居る。まづ宛名から考へて見たい。

「天にいます我らの父よ」。昔ヤコブはヤボクの流のほとりに於て怪しげなるものと角力をしたが、あに闘らんや、相手は神々しき御方であつた。だんだん力を角するうちに、彼は神についてこれまでと違つた經驗を得て、これと呼ぶに從來用ひた名を以てしてはもの足らず、何か新しい名がなくてはその折の新しい經驗には相當せぬことを感じた。ユダヤ人は昔よりその禮拜の對象を全能者もしくは神と呼んで來たが、ヤコブこの用ひ慣れた名だけでは自分の經驗を言ひ表はすに足らぬを感じ、相手に對して「汝の名は何ぞ」と問うた。新なる信仰の經驗を得た場合には何人もまたこれにふきはしき新たなる名の欲しいものである。

基督教に於ては他の宗教と異つた新なる信仰が信者各自に實驗せられて居る。この新なる信仰に當てはまる名を以て神と呼ばねばならぬ。その名はすなはち「父」である。しかし神を父と呼ぶことは舊約聖書にも見える。その外アボクリファのうちなるエクレシヤステクスなどには、舊約聖書の記事よりも、もつと明瞭に神のことを父と稱してある。「あゝ主、我が生命の父、また君よ。我をすて、彼の輩の計畫のまゝに任せ給ふ勿れ」云々。その外同じアボクリファの一つなる「トビット」にも「神こそとこしへに父なれ」と記してある。支那や印度にもこの種の言が無いでは無からう。それ故基督教以外にも神を父と呼んだ例の無きにも限らぬ。しかし基督教に於けるが如く、明かに深く適切にこれを使用し、これではなくば神のことを言ひ表はすに足りぬと云ふほどの意味には達して居らぬ。その意味を基督教の父と云ふのと比ぶれば影法師の如くに、もうろつたるものである。ガラテヤ書第四章六節に「斯く汝等神の子たる故に、神は御子の御靈を我らの心に遣して「アバ父」と呼ばしめ給ふ」と記してあるが、これ基督教の特徴である。基督教は神と人とを譬へて單に親子の如しと云ふのでない。すなはちイエス・キリストの靈を賜はり、その靈によりて神を父と呼ぶのである。神は造物者もしくは上帝と云ふやうな意味に止まらず、實にイエス・キリストの父である。父母と云ふにも種々あらう。孤兒院に於ては院長は孤兒の父、その妻は母と呼ばれて居る。ある不潔なる社會では、悪しき營業を爲せるために抱へた女子をして、抱へ主に對し母と云ふ

名稱を用ひしむる習慣もある。あるひはこれらに較べて一層關係の深い我々親子の間にしても時として、中々難かしい事情が起る。親子は他人の始りとさへ皮肉る場合もある。かく親にも種々あつて、神と人との關係をたゞ普通の意味に於て親子に譬へるのは、不完全にしてまた誤り易い。しかし基督教の神はイエス・キリストの父である。これがその意味を解釋すべき目じるしである。神に對するイエスの關係また如何にも美はしく、切なる愛を以てこれに事へ、よくその孝道を全うして居られる。ま心を以てその救にすがり、その恩寵に浴するとき、主イエスの靈が我らにも與へられ、神の獨り子の精神に化せられ、神を父と呼ぶ意味も全く一變し、美しく温かい慈愛に充ちたものになる。かゝる意味に於て基督教の神は父である。言葉は同一でも、その内容は同日の談ではない。神は迷ひ出でし我らを求め、我らの罪を負ひ、我らの爲に限り無き苦痛をなめ、その獨り子を賜ふほどに我らを愛せられる。これと呼ぶに「天にいます我らの父」と云ふのは最もふさはしきことである。

しかし單に父と云ふのみでなく、我らの父である。天の父は我が獨り占めにすべきものでない。自分の外にも子等がある。我らは兄弟とともに相並んで父に事ふる態度であるべきを忘れてはならぬ。すなはち基督教の祈禱は友情を重んじ、四海みな兄弟たるの思が深くそのうちに根さして居るべき筈である。

正しき意味に於て人道と云へば、勿論神に事ふることも含んで居るが、一寸聞くと人間ばかりの關係に止る如く感ぜられる。しかし人道が果してこれに盡きたとすれば淺ましいものである。親の居る間は兄弟親しくして居ても親が亡くなると扇のかなめの離れた様に散り散りになる家庭も少なくない。親の無い兄弟は氣の毒である。「天にいます我らの父」を有たない人道主義の危険なことはフランス革命の歴史に徴しても明かである。當時フランスの革命家は、自由、平等、兄弟の三大主義をひやうばうし、これを以て社會の改造を企て、目覺しき活動を試みて天下を風靡した。あたかも我が邦に於て數十年前（福澤氏の『學問のすゝめ』がその一例）さかんに獨立を鼓吹した頃、獨立と云ふ言葉がしきりに流行して扁額などにはそれにちなんだものが用ひられたやうに、フランスに於ても自由、平等、兄弟と云ふ言が到る所に使はれて、それを石に彫刻したものが今日でもバリあたりには遺つて居るさうである。しかるにこれをひやうばうした連中の多くは無神論者あるひは宗教無頓着者であつた。そこで結果は如何であつたか。さながら獸の相ほふる如く、血の雨を降らせて修羅のちまたを現出したのである。もし同胞主義博愛主義を人間の關係のみで満足しようとするならば、その結果しばしば同じ運命に陥らざるを得ないであらう。それ故一家に於ては佛壇に位牌などを安置して、ある勢力のもとにその團結を鞏固ならしめようとつとめたのである。しかしそれ位の工夫ではたうてい、まとまりの着くものではない。兄弟打ちそろつて畏れ敬ひ、誠實を盡して仕ふる神が無ければならぬ。詩篇には「畏れ戦いて喜べ」（二・一一）と記してある。敬虔と歡喜とこの二つがよく調和した心持がすなはち主イエスの靈を受けて神を「我らの父」と呼ぶ心で

ある。これ無くば兄弟の道は決して全うせられ難い。

主イエスの教へにより、その心を受け、同胞を愛する精神をこめて「天にいます我らの父」を見上げ、その慈愛に感激し、一種言ふべからざる所の平和を心にたゞへつゝ祈を捧ぐることが出来るならば、それだけでもすでに大なる祝福である。この一句に表れた関係が何よりも深き喜である。病氣のなほるよりも饑渴の癒さるゝよりも結構な話である。たとひ人に罵られ、世に辱めを受け、十字架にかけらるゝ如き場合に陥つても「天にいます我らの父よ」と祈り得るならば、すべての損失をつぐのひ得てなほ餘りある所の獲物である。とてもイエスの心ほどの高きに及ぶことは出来まいが、なほこれに倣うて成るべく深くその内容を會得し、ますます適切にその意味をかみしめたいものである。

三 御名、御國及び御意

「願くば御名の崇められん事を、御國の來らんことを、御意の天のごとく地にも行はれんことを。」（マタイ傳六・九、一〇）

前に説いた天にいます我らの父は、イエス・キリストに於て最も明かにその聖旨を顯はし、我ら人類を子として愛し、その亡び行くをいと惜んで救ひの道を示し、悔改むるものを喜んで受けいれ給ふ。我らこれらのことを無上の光榮として喜び、これを重んじ、その恩寵に感謝し、ま心を以て神に事

ふる。これが「御名の崇めらるゝ」の意味である。もし神の恩寵を無視し、衆人の前に於て天父の光榮を顯はすべき場合に神を信ぜざるものゝ如く口をつぐんで引き込んで居るならば、あたかも學問の出来る、身分の良い息子が、國許より來た田夫野人の老父を親にあらざるかの如く人前を取りつぐらふ陋劣なる態度にも似て不孝これよりも大いなるは無い。「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」と支那人は言つたが、基督教に於ける孝道また然り。我ら人類に對する天父の貴き思召し、あるひはその神々しき御姿を力の及ぶ限り顯すことを心がけ、告白すべき場合には必ず告白し、讚美すべき場合には憚らず讚美せねばならぬ。ユダヤ人は漬すことを恐れて神の名を呼ぶを成るべく避け、外の語を以て言ひまぎらすか、然らずんば黙して済したのである。その用心深き點は感心すべきも、當然これを言ふべき場合に、何か、しさいらしく引き込ませおくのは、一步を誤れば敬遠主義に陥る恐れがある。基督者はその國家との關係社會の禮儀作法、營業上のこと、縁組のことなどすべてこれらの問題については神の御名を崇めて居る平生の志の當然出て來べき筈であるに拘らず、これを出さずに居る場合が多い。我らは如何に神を重んじて居るか。包まんとしても包みおぼせず、何人にもそれが見えるやうであらねばならぬ。神の慈愛が人に無視せらるゝ如き場合には、これを歎くこと甚しく、あたかも古への忠臣が「君辱しめらるれば臣死す」と言つたほどの精神を懷くべき筈である。我ら自分の體面に係ることはすぶん心配をする。しかしそれにもまして大切なるは神の御名の崇めらるゝことである。

『御國の來らんことを』。

神の國の第一の意味は、我らの心にキリストを迎へてこれを主人と仰ぎ、諸事萬端その方針に従ひ、一切神の支配にもとづくを言ふ。その第二は、家族の關係、政府と人民との關係、資本家と労働者との關係、などその他様々の點に於てよく神の律法の行はるゝを言ふ。我らは時の勢、時節柄如何にもがいても仕方がないと、あきらめることがある。かゝる一種の宿命説によつて、さながら流れに従つて舟をやる如く、世の風潮に對して一とたまりもなく敗走することは残念千萬である。我らは神の國を理想として、これが爲に抗爭することを辭せざる主義の上に堅く立たねばならぬ。ただ成り行きに任せて何らの努力をも試みず、たかをくゝり、むさうさに落着いてしまふのは今日の流弊である。この間にありて剛健なる改革の精神を維持し、主に對する忠義の心燃ゆる如く、臥薪嘗膽、神の主權の行はるゝ様に力を盡すことが大切である。第三に、この二句はさらに將來を待ち望む意味を含んで居る。たゞに現在に於ける期待に止まらず、神の御意の次第に行はれて、萬民救を得、キリストの大なる榮光を以て世に來らるゝを待つ心である。今は詳しく説くことは出来ない。しかし、現在及び來らんとする世の希望との、この二つの方面より我らは『御國の來らんことを』と祈らねばならぬ。病人が眠られぬ夜半にひとり寢返りしながら遠寺の鐘聲を數へつゝ朝の光を待ちわびる如く、人みな眠つてゐる中にひとり醒めて『御國の來らんことを』と祈る。すなはちかくして改革の精神は起り來るのである。支那の革命はおそらく種々の方面より考へて喜ぶべきこと

であらう。イギリスの詩人ウォルズウォルスは、初めには佛國の革命を喜んで歌つたが、後には失望した、と云ふことがその傳記に見えてゐる。支那のことも如何なるであらうか。すなはち懸念すべき問題である。人間の進歩と云ふものは百歩を運んでも、その九十九歩はむだあしに歸し、わづかに一步だけを進めるに過ぎぬと言つた人もある。あたかも螺旋の如くで、その回る道程は長いが、進む度合は僅かである。しかし、我らは神の國の理想を目當てに屈せずたゆまず、世界の進歩と改革とをはかり、神の主權のあまねく認めらるゝに至るまで、この祈禱の精神を貫徹して行かねばならぬ。

『御意の天の如く地にも行はれんことを』。

これは全く己をすてゝ神にまかせ、吉凶禍福すべて神の智慧と愛とを信じて自ら安んずることである。すなはち柔和に謙遜におのが分際をわきまへ、少しもつぶやくことなく最も喜ばしき意味に於て、あきらめることと解する人もある。しかしこの解釋は狭きに失してゐる。何となれば『御意の天の如く』と記してある。天には苦痛を忍ぶべき疾病があらうか、敵があらうか、不自由なる境遇があらうか。天に於てはすべてが順境である。其處は勝利と榮光に輝く所である。故にこれは辛抱すると云ふ意味よりも、むしろ積極的に活動し、各自、分相應に奉仕し責任を負うて、かひがひしく働くと云ふ意味ではあるまいか。我らは神の國の公民、主イエスの家來である。森蘭丸や木下藤吉郎は、つねに主君の御用召の先を越して勤めた。君召さば駕を待たずして行くと云ふ態度を以

て、あるひは天使が神の御前に立ち働く如く、御名の爲に一身を獻げて、ぬかりなく御奉公にいそしまねばならぬ。もし正直にこの祈禱をさゝぐるならば、その生活は活動的となり、主の御召を待たずして猶豫なく着々責任を果すことが出来るであらう。ニウ・ヨルクのスピイアは日露戦役當時軍籍にある一人の日本人が召集令の下るに先立ちて故國に歸つたのを材料とし、神に事ふるには、すべからかくの如くなるべしと云ふ意味で小冊子の一章を書いた。實際之のやうな心掛で神に事へてこそ立派な基督者である。己れの乏しきを訴へ、困難より救はれんことを願ふが如きはあとに廻し、まづ御名の崇められんことを願ひ、神の國の御用を勤むことを先にせねばならぬ。

四 日ごとの糧

「我らの日用の糧を日毎にあたへ給へ」。(ルカ傳一一・三)

祈禱の始めの部分に於て、先づ神のことについて祈ることを教へられたが、次には自分のことや人類一般のことに移る。これが祈禱の當然なる順序である。かつ先づ人の肉體に關する事柄から始め、段々と靈魂の方面に及ぼされた。低きより高きに、小より大にと、祈禱には正しい秩序がある。

支那人も「衣食足りて禮節を知る」と言つて居るが、人の半面は動物で、肉體を有つて居る以上まづ手先き身體のことより考へ始めるのが當然である。しかしこれを思ひ違へて、飛んでもない唯

物論的の誤つた方向に進んでは困る。とは云へ、衣食足りて禮節を知ると云ふ眞の意味は、基督教によつて始めて正しく解決せらるゝであらう。今日の社會は人の動物的側面の種々なる必要が切迫して居る。これを等閑にして靈魂のことに力を用ふることは出来ぬかも知れぬ。すなはち事柄の大輕重はともあれ、我らはまづ「日ごとの糧」について祈らねばならぬ。

「日ごとの糧」と云ふ原文の譯し方には中々議論がある。「我らに無くて叶はぬ糧」あるひは「明日の糧」と譯するなど、種々説もあるが、「明日の糧」とする方が最も穩當であらう。すなはち明日の生活について祈るのである、イエスは「明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり」(マタイ傳六・三四)と教へられたが、人間は意氣地の無いものである。明日はどうなることかと絶えず氣にかけて、その苦勞に力も根も盡き煩悶して罪を犯す様な場合に陥ることもある。そこで「我らの明日の糧を日毎に與へ給へ」と祈り、人事を盡して神の恩恵を求め、その日その日を送るのが道である。たゞ身一つの力では、明日を思ひ煩はぬやうに努力してもむづかしい。及ぶかぎり手は盡し、それ以上は祈禱を以て生活するとき始めて「明日を思ひ煩ふ勿れ」と云ふ教が實行せらるゝのである。我らは今に至るまで、養はれし恩恵を鮮かに記憶して感謝に堪へぬ。これより前途もさう案じたものではない。今日も與へ給へ、明日もまた、既往に於ける如く將來も護らせ給へ、と我が身をしかと天父の御保護に委ね、感謝と希望と平和とに充ちてこの祈禱をささぐべきである。

次に注意すべきことは、この一句の始めの「我ら」と云ふ言である。すでに前にも説いた如く、基督教は家族的團體の生活を重んずる教である。食事にしても犬が骨を拾ひ、物かけに隠れてかちる様に、各自別々にひとり食ふのは如何にも興の醒むるわざである。かつて讀んだ西洋の小説に、ある人が獨身になつてから胃を悪くした。仲間と一所でないといふ食事をして胃の腑が働かぬ。ましてやその食事が精神的に消化せられて、愛を増し人の徳を建つることなどは思ひも寄らぬと云ふ様な意味が書いてあつた。これが人間らしい所である。元來我らの生活は人とともにすべきものであつて、たゞ獨りの生活は人間の本性に適せざるものである。しかし祈禱に他人のことを思ふにしても、我が家族あるひは學校を同じうするものなど、その境遇相似たるものの範圍に限るは（もとよりそれも大切ではあるが）大いに祈禱の趣味を減ずる。「我ら」の範圍は更に廣い。我らが日用の糧を與へられんことをと祈るは、社會のあらゆる階級の人を心におぼえて祈るのである。それは故家に貯蓄があつて、明日を思ひ煩ふに及ばぬ氣樂な身分の人も、世には多く飢ゑたる者、あるひは戰場にある者、其他種々不自由なる生活に惱める人のあることを思ひ浮べて、熱心に「我ら」の糧の爲に祈ることが出来るのである。この同情ゆたかな祈禱が朝夕正直にさづけらるゝならば、如何に精神が美しく教育せられるであらうか。この祈禱の精神を以て食卓に向ふなれば、始めて神を父と呼ぶものらしく食事をすることが出来るのである。

この祈禱は必ずしも明日の糧を氣づかふ故に必要であると云ふのではない。すなはち倉庫にあり

餘る食物があるとしても、この祈禱が必要とは言へぬ。たとひ粒々辛苦、腕二本で貯へた富であつても、ひつきやうは神の御蔭であることである。我らにこの祈禱の精神が缺けて居るならば、傲慢にも自らの力をたのみ恩恵を忘れて、苦しい時の神頼みと云ふやうな場合の外は神について考へぬ様な現金なる生活に陥るであらう。されば何不自由なき身分のものも、朝な夕なに推し戴いて神の賜物を受ける心がけが大切である。一天萬乗の君も、朝夕の煙も立てかねる賤が伏屋の民も、みな謙遜にこの祈禱をさづけ、神を敬ひ、その恩恵を感謝したいものである。また一方より考へれば、我らの身體も衣食住も、すべてこれ神の賜物である。變化極まり無い我らの世渡りに於て、かゝる物質上のことについても、ことごとく神に依りすがり、萬事を打ち任せる態度が必要である。かくしておのおの業に勵み、額に汗して獲たものを用ひるならば、その間には感謝も同情もあつて、食事の意味も新しい趣が加はつて來るに相違ない。

これまで説いて來ると、祈禱の順序として罪を赦すことなど、漸く精神上の方面に言ひ及ぶべき筈であるが、それに先立つて、イエスが肉體上のことに関して教へられた意味を深く考へておきたい。主イエスが、世にあられた日に、彼は幾たびか人の飢ゑを救はれた、またその憐れみが如何にしばしば人の肉體の上に係つて居つたか、それらのことを思ひめぐらすならば、我らもある場合には心をこめて、かゝる物質上のことをも心配せねばならぬわけが解るであらう。ヤコブ書には、人が飢ゑを訴へて居る場合に、何かしさいらしく説教じみたことを言つて、自分の身には何のつらさ

をも感ぜざる輕薄な挨拶を以て、實際上の責任を口の先でまぎらかす様な仕方を手痛く非難してある。(ヤコブ書二・一四—一六)世には基督教を誤解して、遁世的で經濟などは一切關係せざるもの様に考へる人々もある。しかしこれは大いなる誤りである。イエスは日頃友人の間に在つて、ともに喜びともに祝うて樂しむのが習慣であられた。彼は精神的事であつたが、妙な仙人くさい所は決して無かつた。衆人と共に飲み食ひせらるゝを厭ふことなく、かのバプテスマのヨハネと異なるは當時の人々も直ちに感知することが出来たほどであつた。高尚な靈的の祈のうち、日用の糧を與へ給へと云ふ如きは、如何にも俗臭があつて調和を破り、歌ならば腰折れであると考へ易いが、決して然らず、この一句には深くまた高い精神がこもつて居るのである。基督教は精神的なりと揚言して日常のことに不注意なるは、イエスに忠なる所以でない。

かくの如くして兵糧は調つた。「御意の天の如く地にも行はれんことを」と云ふ高尚な任務を引き受けて事に當るに堪へ得るやう、すでに糧道は開かれて居る。我らの生活はこゝに一步を進めて、さらに深い精神上の方面に向はねばならぬ。糧の問題も大切であるが、人間の能事はこれに終らぬ。もしそれ以上に出ることが出来ないならば、人として遺憾の上も無き次第である。

五 罪 の 敵

「我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給へ」。(ルカ傳一一・四)

前回に於て神より賜はる日用の糧について考へた。たしかに神は我らを支へ、重大なる任務に就くに當つて必要なるものを與へ給ふ。従つて起る問題は我らの罪である。御名の崇められ、御意の天の如く地にも行はるゝやう努力すべき責任が我らにある。これが爲に天の神から扶持を戴いて居る。實にこれが爲に生存して居るに外ならぬ。しかるに我らの現状を云へば神の恩寵をいたづらに受けるのみで、神に果すべき責任は果して居らぬ。あるひは幾分の奮發もしたが、薄志弱行、中途にして挫折し、神の知遇を空しうしてこゝに幾年月を経たのである。英文の聖書にはこの祈の前に而して、と云ふ辭が入れてある。すなはち我らは日ごとこの糧を與へられんことを祈ると同時に、朝夕畏れをのゝいて「我らの罪をも免し給へ」と祈らざるを得ぬと云ふ意味である。

罪とは道理や法則に背くと云ふだけではない。活ける神に背き、その愛を無視することであつて、すなはち恩義深き君主に對してむほんすることである。それ故「我らの罪を赦し給へ」と祈るはあながち犯罪の結果自分が今難儀して居るからその苦痛をまぬかれん爲に我が罪を赦されんことを願ふと云ふ意味ではない。かゝる利己的な願は、眞に赦罪を願ふ基督者の志でない。むしろせめてもの罪滅しに、あらゆる苦痛をいさぎよく受けんことを喜ぶべきである。貧窮の救はれざる、病苦の癒されざるはなほ忍ぶべし。忍ぶべからざるは神との平和の破れしことである。願ふ所はたゞ神との關係の圓滿ならんことである。神の御意ならば、これがため水火と雖も辭せずと云ふのが、

基督者の赦罪を祈る心である。これをたゞ己が身の安樂をのみ願ふ輩に比すれば、その心がけの精神的なること、雲泥の差ありと言はねばならぬ。

さて罪の意味を單に悪事を働くことのみと解するならば、あるひはさやうなる覺え無しと言ひ得るかも知れぬ。しかし祈とはマタイ傳に記されし如く「負債」と云ふ意味である。「負債」と云へば意味が廣い。人を殺さずとも人を救はぬことは負債である。我らは果すべくして果さざりし負債を數へ盡くせぬほど有つて居る。マタイ傳第二十五章四十一節以下に「……誼はれたる者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備へられたる永遠の火に入れ。なんぢら我が飢ゑしときに食はせず、渴きしときに飲ませず、旅人なりしときに宿らせず、裸なりしときに衣せず、病みまた獄に在りしときに訪はさればなり」と記されてある。見よ、重刑に處せらるゝ理由は、決して人の飲食物を奪つたが故でなく、人の衣服をはぎ取つたが故でもない。いと小さき者の一人の爲に、心を配り手を盡していたはるべき場合に、輕薄にこれを見過した故である。かく考へ來るならば、我らが重ね重ねの罪人たることは明白であつて、「我らの罪を赦し給へ」とは、すべての人のささぐべき祈禱であることが了解せられるであらう。

次に考ふべきはこゝにも「我ら」と言ふ言葉の用ひられたことである。前回の糧に關する祈禱に於て説いた如く、罪についても我が身のことばかりでなく、他人のことをも思はねばならぬ。親しき家族の中に、もし不都合を働く者あらば、たとひ自分に何の咎は無くとも、身うちの一人として

神と人との前に恐れ多く思ふのが當然である。たゞに家族のみでなく、國家や社會の罪をも感じて神にその赦しを願ふべきである。イザヤは選ばれて豫言者とせられんとする時、「禍なるかな我ほろびなん。我は汚れたる唇の民の中に住みて穢れたる唇のものなるに、我が眼萬軍のエホバにまします王を見まつればなり」(イザヤ書六・五)と神の前に恐懼した。みだりに社會の奸惡を罵り、世は末であると冷淡に觀察し、自らは局外に立つて批評するが如き極端なる個人的態度は、基督者のとらざる所である。

今から三十年ばかり前に、二週間ほどワシントンに滞在したことがある。その頃あたかも出版せられた書物に、米國の歴史上大切な文書、たとへば獨立の布告文とかあるひはワシントンの大統領の就任演説とか云ふ類のものを集めたものが有つた。當時それを讀んで最も刺戟せられたのはリンコルンの第二回大統領就任演説の一節である。彼は人も知ることく奴隸廢止の爲に自ら一命を賭して戦ひ、つひにその生命をささげたのであるが、その演説に曰く「北部にも、南部にも、この度の恐るべき戦ひは、我らに取りて罪惡の報いなることを覺らざるべからず」と。その外、彼の手紙の中には、國家及び國民の罪惡について、自らしみじみとその責任を感じる旨記したものが少からずある。彼は奴隸制度の罪惡なることを主張し、これを廢止する爲に戦つた人である。しかもその罪を敵にのみ負はせず、北部も南部もともに、「我らの罪」なることを知らねばならぬと、さながら塵芥の中にでも身を埋めた心地して、深く國家を憂へたのである。政治家もかくてこそ偉大なりと

言ふことが出来るであらう。

もし今日世の父兄たちが、一家の中に不良少年のある爲に心を痛むるにしても、たゞに世間態を恥ぢ、あるひは金錢を空費されたことを嘆くに止まらず、その罪に思ひ及んで自ら神の前に恐懼し、あるひはさらにこの關係をおし擴めて朋友國家社會などに對するならば、この世界の狀態はたしかに一變するに相違ない。イエスが十字架に於て「父よ彼らを赦し給へ。その爲す所を知らさればなり」と祈られたのは（ルカ傳二三・三四）すなはちこの意味である。罪を犯せる當人どもは平氣で居たが、ひとり目覺めし良心を有てるイエスは罪の爲に苦しんで赦罪を乞はれたのである。かくの如く我が身も世の罪に連坐して居るとの精神があるならば、毎日讀む所の新聞紙も一種の聖書となつて、國民のため社會のために懺悔し祈禱する媒介となるであらう。實に大なるは我が罪、人の罪である。ひたすら御赦しを願ふのほかは無い。我らにこの恐懼の念があるなれば、如何して他人の罪をのみ酷に責めることが出来よう。必ず美はしい同情が湧き出で、人をうるほし、悔改めて救に入るの端緒を與へることとなるであらう。世にはプリマス・ブレズレンの如き氣取屋もあつて、一旦罪を赦されし基督者がさらに赦罪を願ふ必要は無い。この祈禱の如きは基督者のささぐべきものではないと言ふ。しかしこれは大いなる心得違ひである。罪なきイエスさへ人の爲に罪の赦しを祈られたではないか。とかく、考へ方が「すでに赦されたり」と云ふ方にかたよつて、「赦したまへ」と祈る心の足らぬのは信仰上、危險である。我らは「我らの罪を赦し給へ」と目ごと怠らずし

て、祈るべきである。

次に「我らに負債ある凡ての者を我ら免せば」云々とある。赦すと云へば、おゝだくだく、如何なる者をも友とするやうにも聞えるが、決して然うではない。盜賊は盜賊としてこれを警戒せねば我が持物はことごとく奪ひ去られるであらう。無論これを引捕へて一々警官に渡すと云ふことは考へものであるが、かゝる徒輩に對しても、そのまゝ何の隔て無く心を開いて友とすることは、偽善にあらずんば、すなはち愚なりと云ふべきである。否、不道德なのである。「もし汝の兄弟、罪を犯さば、これを戒めよ、もし悔改めなば之をゆるせ」（ルカ傳一七・三）赦すことは無條件ではない。もし彼にして惡事を固持し、悔ゆることなくんば絶交することもまたやむを得ない。基督教は好き意味に於て潔癖である。善惡無差別、むやみに敵を赦すのは輕薄である。むしろ正しきに返らんことを願ひつゝ嚴格に絶交するのは眞に敵を愛するの道である。基督教の愛は識別を重んずる。玉石こんかうをゆるさぬ。たゞ甘いばかりでなく辛みをも含んだ愛である。我らの神は正しい神である。

リンコルンが合衆國全體の責任を負ひし如く、我らもまたこの祈禱の精神を會得して、親子夫婦兄弟朋友及び社會の罪を考へ、我もまた罪人の一類たることを思ひ、謙遜と同情と恐懼とを以て、目ごとに我らの罪の赦されんことを祈らねばならぬ。

六 誘 惑

「我らを嘗試こころまに遇せず、惡より救ひ出したまへ」。(マタイ傳六・二三)

この祈禱に就いて先づ不思議に感ぜられることは、神が我らを試みに遇はせ給ふと云ふことである。これは怪あやしかる話ではないか。はたしてかゝることの有り得べきであらうか。我らの信するが如く、この世は慈愛深く且つ正しい神のしろしめす所であるとするなれば、惡魔の誘惑するをそのまゝに、せらるゝさへ如何かと思ふに、ことに我らをしてこの危険なる場合に置き給ふと云ふが如きは、解し難い話である。たしかにこれに就ては、人智の得て解すべからざる問題があるに違ひない。しかしこゝに我らの心を慰むるに足るものがある。かゝる試みもまた神の慈愛深き賢い攝理のもとに行はれると云ふことである。神は人に對し決して無理な要求をせらるゝ筈がない。故に誘惑といへども我らをして到底如何んともし難いほどの窮地に陥らしむることは出来ない。如何に手強てつい惡魔の誘惑でも、必ずしも氣を落し肝をつぶすに當らぬ。みなこれ神の支配せらるゝ領分の外に一步も出づることを得ないものである。こゝに我らは幾分の安心を得て頼もしく心丈夫に感すべきである。

一體我らを試みると云ふことと試みに遇はせると云ふこととは意味が異つて居る。また試みると云ふことにも二つの意味がある。一つは品物を火にかけなどして、ほん物であるかにせ物であるか

を吟味し、あるひは品物を良くするために、これを鍛へ、もしくは玉として磨きあげると云ふ様な意味である。他の一つは惡を犯さしむることすなはち誘惑であつて、惡魔の行爲わざである。もとよりかゝる試みを神の爲し給ふ筈が無い。しかし我らを誘惑せらるゝ所へ追ひやり、危険な場合に遭遇せしむることは慈愛深き神にもあり得べきことであらう。かはゆき子には旅をさせる。親はその愛する子が道中に於て、ごまの灰など人をたぶらかす奴らの餌となり、または惡所にも引き込まれ易い危険あることを承知の上で、なほあたかも獅子がその兒を谷ぞこへ蹴おとす如く、教育のため必要と認むる場合には、危険を冒しても行かしむることが、しばしばあるのである。すなはち誘惑するものは道中の惡漢であつて、誘惑に遇はせるものは親である。神はかゝる意味に於て、その慈愛深き御旨から、我らの品性を鍛錬するため、誘惑に遇はせ給ふこともまた有り得べき道理である。聖靈がイエスを野に追ひやつて、惡魔の誘惑を受けしめたことなどを深く考へるならば、けだし思ひ半ばに過ぐるであらう。(マルコ傳一・一二参照)

先年一人の婦人が好成绩を得て學校を出で、直ちにある職に就いて、その任地に赴かうとするとき、自分の所へも暇乞に來た。彼女は元來質素な婦人で、あまり身のまはりなど構はぬ方であつたが、その日はすゑん着飾つて居た。自分はそのあまり打つて變つた姿を見て、これはあぶない。あるひは成功が失敗となり、出世して墮落することは有るまいかと行末を心配したが、案の如くこのたび旅行から歸つて、彼女の身の上に不評な噂を聞いた。かやうなことはこの外にも少からず有

るであらう。たゞに一個人のこのみで無い。傳道や牧會のことに於ても、長い月日の間にはしばしば思はぬ危い目に遭ふことがある。魔がさすと云へば迷信の様に聞えるが、我らの生涯にはわづかの油斷から、回復し難いほどの破滅に陥る危機が幾たびかある。それ故我らはかゝる誘惑に對して大いに警戒を加へ、戦々兢兢としてこれに當り、もし能ふべくんばこの杯を我より過ぎ去らせ給へと祈らねばならぬ。しかるにこれをあまり氣にもかけず、うは調子で出かけるならば、必ず恐るべき失敗に陥るを免れない。今から三十一年前に一人の傳道者を西の方へ送つたことがある。彼は中々好人物であつたが、暫くするとこれに添書を持たせてやつたある老練な牧師から、手紙でかう言つて來た。「予は彼のため出来るだけの心添へをして、成功する様に注意は充分する積りで居る。たゞ一つ言つておくが、彼は自分の著手する事業に如何なる危険が伏在して居るかを少しも考へず、はなはだ、のん氣に構へて居る。恐らくは遠からず失敗することもあらうかと心配する」と云ふのであつた。當時あまりこの注意を適切に感じなかつたが、一兩年を経て老傳道者の豫言は不幸にして的中し、彼はつひにその任地に留まることさへ出来ぬやうなはたんを生じた。

昔、徳川家康が、武田信玄と戦ふに當つて二人の斥候兵を出した。その一人は大膽不敵、勇氣四邊を拂ふあつばれた武者振りであつて、彼こそ見事その任務を果すであらうと見えた。しかるに他の一人は命を受くるやたちまち顔色土の如くに變じ、しほしほとして出かけた。並み居る將士はこれを見て、かやつおちけ付いて居るから、必定途中から引き返すことであらうと嘲つた。家康はひと

りこれを否んで、「卑怯と見ゆる彼こそかへつて大膽に危地に踏み入り、敵情をつぶさに視察して歸るであらう」と言つたが、はたせるかな、彼は最も有力なる報告をもたらして歸つて來た。これは家康の傳記中に於てはなはだ興味深い一節である。我らはこの反覆常ならぬ危険の多い社會に於て、浮調子に陥ることを警め、平生深く慎んで「我らを嘗試に遇はせず、惡より救ひ出したまへ」と祈らねばならぬ。

さてこの祈禱の精神より推し、我らはわざわざ進んで危険を冒すやうなことは避けねばならぬ。もとより神の攝理、事の順序としてひくにひかれぬ場合には、勇を鼓して進むべきである。しかしさもなき時に、用も無く平地に波瀾を起すは暴虎馮河の勇である。命を知るものは嚴嶂の下に立たず。君子は危きに近寄らぬ。イエスの誘惑も四十日四十夜食はずして飢ゑたときに襲ひ來つたのである。すなはち物の順序、また勢ひとして段々事が迫つて來たのであつて、賣られた戦ひは買はぬ譯には行かぬ。そこでイエスは、ちうちよせず正面より敵に當つて打ち勝たれた。しかし惡魔が宮の頂きより身を投げて見よと言つたときは、一言のもとにこれを退けて應ぜられなかつた。(マタイ傳四・五―七)自ら好んで身を危険な所に投じ、信仰をきはどく試みることは慎むべきである。これ謙遜にして賢くまた最も安全なる信仰の生活の道であらう。

しかし前にも説いた如く、我らは誠に遇ふべき境遇に推しやらるゝことが無いとも限らぬ。否、しばしばある。もしそれが神の思召とあらば、君命に違背することは不忠の至り、たとひ我が眼に

は八方ふさがりと見える場合にも、神の慈愛深き攝理に一身を託し、はかり難い前途に勇しく進み行くことが基督者の氣前である。家康麾下の彼の勇士は顔色變るほどに一時は憂へたが、しかも進んで偉功を奏したのである。我らは神の照覽せらるゝ戦鬪に臨むのである。昔から主君より同情を受けた仇討はめつたに返り討にならぬ。この上は心丈夫に、有らんかぎりの智慧を廻らし力を振るつて敵に當り、強敵と雖も臆せず、勇氣りんぜんとして立ち向ひ、願くば敵をなぎ伏せ首尾よく仕とむることを得させ給へと祈る、さかんな精神がこの祈禱にこもつて居るのである。他の譯によれば「彼の惡者より救ひ出し給へ」となつてをる。惡者はすなはち惡魔である。基督者は道德的のてきがいに充ちて居る。彼の惡者に取つて押へられて何としよう。すでに一たん敵と立ち合ふからは、驅け破り、突き伏せ、敗くることなどは夢にも思はず、必ず勝ちおはせる希望一杯の靈魂を以て人生の旅路、道德の戦場に出かけて行く。これがこの祈禱の意味また基督者の精神である。

七 イエスの名とアメン

「誠にまことに汝らに告ぐ、汝らのすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし。なんぢら今までは何を我が名によりて求めたることなし、求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悅よろこびみたさるべし。」(ヨハネ傳一六・二三、二四)

先頃から主の祈りに就いて引き續き説いて來たが、こゝに平生祈禱のときに用ふる「イエスの名

に由りて祈る」と言ふ言葉の意味を考へたい。我らは無意味に、また機械的にこれを唱へ、それが爲にイエスの名をかたると云ふ大罪を犯して居りはせぬか。單に人の名をみだりに使用するのみならず、官名を濫用し、あるひは、やんごとなき人の名を用ひて世を瞞着するが如きことはさらに惡し。しかしイエスの名を濫用することはそれ所でない。實に恐るべき罪である。

しからばその意味は如何にと云ふに、これを簡單に説明すればイエスの名代人として求むるの意である。すなはち自分一個の資格でなく、イエスの精神と一致し、その意を受け、その代表者として居ることである。そもそも我らが神を信するにも、イエスによらずして父なる神を了解することは出来ない。神と我らとの關係は、すべてイエスによつて徹底する。單に彼を道德の先生と觀て、孔子や釋迦と程度こそ違へ種類は同じと考へる位では彼の十字架の死や救のことなどはさらに解らぬ。従つて自己に對する解釋も淺く、人の現在及び將來、あるひは世の中の吉凶禍福、成敗利鈍、すべて何を意味するか、その解釋が不明瞭であつて深い所に考へがとゞかぬ。それ故憂國慨世と云つてもその内容はなほだ不満足である。いはんや生死の問題に至つては淺薄極まるを免れぬ。そのやうな立場から神に祈ると、イエスの名に由つて祈るとはもとより同日の論でない。イエスの名に由つて、あるひはイエスの名の爲に祈るとは、神につき、その外萬端のことにつき、ことごとくイエスの指導に従つてこれを解釋し、悲喜哀歡すべて御旨と一致し、我が祈る所は己れ一個の考へでなく、これ主イエス・キリストの考へであると確信して祈る意味である。これを手近く譬へ

て言へば、我らはイエスの代理人として、ある仕事を託せられしものである。我らの商賣も學問も事業もその健康病苦などのことに至るまで、いづれも自分一個の問題として取り扱つてはならぬ、みなこれイエスの代理人として、主人その人の志にかなふ如く處置すべき筈である。屬僚が上官の命を受けて事を辨ずるとき、もし上官の名を盗んでほしいまゝにふるまふならば重罪である。我らはイエスの命を受けて様々のことを切り盛りするに當り、いやしくもイエスの本意にあらざることを行つてはならぬ。凡そイエスの家族たるものはその家憲に従ひ、如何に自分に取つて望ましく感ずることであらうともイエスの賛成せられぬ場合には、斷じてこれを退けねばならぬ。彼より命ぜられし場合には、その事が自分に取つて苦痛が多くとも、なほ喜んでこれに従ふ覺悟が必要である。我らは常々この精神を會得せんことを心がけ、喜怒哀樂ごとく本能的にイエスと一致するに至るやう努力すべきである。かうして事に當つてもまた深く考へ、これぞイエスの命する所、もし願ふなれば直ちに承認せられ、裏書をも連署をもせらるであらうと確信し、自ら正しき代理人たる態度を以て神に祈らねばならぬ。これがすなはち「イエスの名に由りて祈る」ことである。

遠く旅して見も知らぬ人々の中へ行くときにも、もし信用ある人の添書をたづさへ、あるひは有つてゐる爲替に、そのやうな人の裏書があるなれば、それによつて歡待せられ、又爲替も自由に通用するのである。神の國に於て事を爲さんとするにも、それと同じで、必ずイエスの添書をたづさへねばならぬ。また用ふべき爲替には、その裏書が必要である。もしイエスに裏書を拒絶せらるゝ

ならば、用ひるまでもなく引込ませてしまふが當然であらう。すなはち使用する前にまづイエスの同意せらるゝものなるか如何かを考へ、自ら省みて用心するやうになる。この用意と態度とを以て神に祈るのは、偶像信者や、お有難連の御利益主義と全く異つた氣分のものであることは言ふまでもない。しかるに我らはイエスの裏書を乞ひ、その添書を求むる手段を省き、しばしばごまかしたり、あるひは横着をすることがある。とかくその祈禱のうち、ちぢもなないことの出て來るのもこれが爲である。かゝる祈禱が聽かれなくとも、また怪しむに足らぬ。イエスの氣風と相一致しない全く見當違ひの祈禱にも、なほイエスの名を用ひるとすれば、それは主人の名をかたる不届千萬の仕業である。我らはさらに深く教育せられて、正しくイエスの名を用ひる者となりたいものである。

次にはまた、かゝる立派なる添書を買ひながら、これを使用せず居るのは残念なことである。我らは旅中の知人から、親切な紹介の手紙を受け、これを利用したいと思ひつゝも力及ばず、折角の好意を空しくして歸つたときには、その人に對して何となく相すまぬ感じが起るものである。ましてイエスより、ねんごろなる添書を戴きながら、これを用ひることを面倒に思ひ、祈を自分のみの考へ通りにするとすれば、これは不敬の至りではないか。「なんぢら今までは何を我が名によりて求めたことなし」。(ヨハネ傳一六・二四)我らは寶を持ち腐れにして、與へられし權利を抛棄し、さうして常に我が願のとげられざるを不足に思つて居る。しかしイエスの御考へはこれと全

く違ふ。汝らは願はないのである。「求めよ、さらば受けん」。(同上)多くの祝福は汝らの願ひを待つて居るのだ。今までの汝らの願ひは淺はかな勝手なものであつた。我が名によつて求むることを知らぬことは、如何にも残念であると云ふ意味を語られたのである。たとへば親の方では何かためになる書籍を買つてくれと願ひ、あるひは教育博物館へでも連れて行つてくれよ、とその子の求むるものを待ち構へてをるに拘らず、頑是なき子が活動寫眞や玩具屋にばかり連れて行つてくれよと、ねだるならば、親の心にはそれを如何に、もどかしく残念に思ふであらうか。神は與へんとして待つて居られるが、求めぬ故に手持不沙汰のかたちである。神の恩恵は宏大にして汲めども盡きぬ。しかし我らの求むる所は如何にも小さくけちくさい。神方にはなほ取つておきの恩がどれほどあるか、その數が知れないのである。それを折角實の山に入りながら手を空しくして歸る様なことの無いやう注意せねばならぬ。己が一料簡でなく、イエスと精神的に一致し、その代表者として立つ場合には、その資格から考へても卑しいことは出来ぬ譯である。少くとも、鷹が生き餌でなくば食はぬ位の自重心を以て求むべきものを選択すべきであつて、如何なるものでも遠慮會釋なく欲しがる様な根性を一掃せねばならぬ。すなはち自ら一種の威嚴をそなへ、堂々として王者の如くこの世に生活するが基督者の眞面目である。

序ながら「アアメン」と云ふ語は、もと「誠實かくの如し」、「毛頭偽りなし」といふ意味であつて、またイエスの名により祈る所は必ず成るべしとの確信もこもつて居る。我らは心の底からアア

メンと言ひたい。自分の養成することの出来ぬ他人の祈禱にも、むやみにこの語を使ふことは無責任である。我ら願くはイエスの名に於て、イエスの名の爲に、彼と結び彼と聯り、葡萄の幹とその枝との關係の如く、「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」(ガラテヤ書二・二〇)との精神を以て祈り、さうしてアアメンと言ひたいものである。その一語には山を抜くほどの力、世を蓋ふほどの氣はくがこもつてをる。そのひびきには魑魅魍魎も影を潜むるであらう。我らの祈は常にかくありたい。

(一九二二年六月)

三、祈りの生活

弟子たちは主とその祈りの生活とに感じ、自分等の祈に何となく物足らぬ心地が胸に湧いて来た。これが缺陷を補ふ道を見出すべく、『主よ、ヨハネのその弟子に教へし如く、祈ることを我らに教へ給へ』(ルカ傳一一・一)と願ひ出た。吾人もかく教へを受けねばならぬ必要がある。もつと好き祈がしたい。『我らは神の中に生き、動き、また在るなり』(使徒行傳一七・二八)『我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり』(ヨハネ傳一五・五)神と人との関係はかくの如くである。大氣のうちには棲息する人、呼吸に不便を感ずるときは、苦痛を覚える。轍の鮒はふたゝび元の水に入り得ざれば死を待つ外ないのである。我等の靈魂もこれと同じで、神と離れては健全なる活動を遂ぐる事が出来ぬ。さうしたはては靈なる生命を失ふに至るであらう。

宗教はすなはち神と人との間に、この精神上の關係を保ち、その交際をいよいよ深からしむる道である。それが意識の上に現はれ、切なる情感を伴ひ、志にも發するを信仰と言ふ。その形に表現し、言葉に出づるものが祈である。

神はあまねく照らす光明である。すべてのものを包む暖まりである。『そのひゞきは全地にあまねく、その言は地のはてにまで及ぶ』(詩篇一九・四)實に『エホバよ、なんぢは我をさぐり我を知り給へり。汝はわが坐るをも立つをも知り、遠くよりわが思ひを辨へ給ふ。……なんぢは前より後より我をかこみ、わが上にその御手を置き給へり』(詩篇一三九・一一五)である。神はかくの如く吾人のすべてを見そなはし、心の秘めごとに至るまで知らざるところが無い。祈らざるさき、すでに無くてかなはぬものを明かに見て居られる。それだから神に訴ふことも出来る。祈をなすの道理もある。しかし神の吾人に對する關係とその恩寵の深いはたらきとは、こちらの精神状態、言ひ換へれば祈に制限せられるところがある。如何なるものにも雨は降り、善人をも悪人をも日は照らす。しかし、世にはかくの如く往かないものもある。こちらの精神状態一つで、あるひは獲られ、あるひは獲られざる種類のものがある。これらは祈るを待つて與へられるのである。すなはち求むる者にして與へられ、門を叩く者にして開かれ、尋ねる者にして見出すことが、そのきまりである。神は人の自由を重んぜられる。その志を見るにあらざれば、御手を出し給はない方面がある。決して推參がましく來られるのではない。しひて恩寵を押し付けにはなさらぬ。その心が貧しくならなければ、これを満たすことが能はない。その心清からざれば、その御すがたを示すことは出来ぬ。平和を求むる者にあらざるものを、みだりに神の子とは稱へることを、ゆるされぬ。であるから、神は求めざるさきに何事をも察知して居られるけれども、また吾人の方からも祈らねばならぬ

と云ふ道理になるのである。

「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも……」と言ふものもあるが、それははなはだ不徹底な言ひ分で、少しも意味を成して居らぬ。一がいに誠の道と云ふけれども、誠の道にかなふとは元來如何なる意味のことであるか。己れの缺陷を感じ、薄志弱行なることを覚え、神の知らざるころなく、漏らすところなき慈愛に感激し、これに力を得、心を強められ、望を起し、志を引き立てられて、信仰の念がしきりに燃え、向上心がさかんにたかまるにあらざれば誠の道にはかなはないのである。さうでないのは、人道をはずれ、偽りの路に入つたのである。またかくの如き精神状態となつて、誠の道を心に體得し、これを實現するのがすなはち祈である。それにも拘らず、「祈らずとも」と言ふのは自家撞着におちいつた考へ方である。あるひは「祈らずとも」と云ふのはいはゆる御祈禱で、唱へ事を指すと辯ずるであらう。しかし祈すなはち誠の道にかなふと云ふ精神状態がすでに心にはいたし、胸に溢れ、しきりに思ひ續け、感極まり、情動き、望湧き、志、金鐵の如く堅固なるものがあるならば、どうしてもこれを形に現はし、言語にも發せねばならぬ様になつて來るのである。しひてこれを押へ付けて黙殺するならばそれははなはだ不自然である。

祈はもとより精神的のことに相違ないが、これを形や聲に發することが自然で、さうあるのがその本來の性質である。故に祈と言へば必ず誠心誠意、口に宣り出すものと極つて居るやうに解釋せらるゝに至つたのである。思ふことを言はざるは腹ふくるゝわざである。それでは咲かざる櫻樹、

かほらざる梅花の如く、はなはだ物足りないことである。

「たえず祈れ」(テサロニケ前書五・一七)と吾人は教へられて居る。たゞ口に現はすものとするれば、たえず祈ることは不可能である。しかしこれを精神的に解釋し、誠の道にかなふ様に心を持つることと見るならば、たえず祈ることも出来る。吾人は「神のうちに生き、動き、また在る」(使徒行傳一七・二八)のであるから、暫時も神と離れては人として精神的なる生命を全うすることとは出来ぬ。生物が常に呼吸せねばならぬ如く、魚の水中に泳がねばならぬ如く、吾人もたえず祈り、常に神の靈的生命と氣息を通して居らねばならぬ。基督者の靈魂がもしも間斷なくキリストの中に呼吸して居らないなれば、その生命を保つわけには往かないのである。

二

このたえず祈ると云ふことは吾人が間斷なくキリストとともに在り、志これと通ひ、趣味も一致し、生活の全部がこれと共鳴し、「御名の崇められんことを、御國の來らんことを、御意の天の如く地にも行はれんことを」(マタイ傳六・九—一〇)とねぎ求むる態度を保つて居ることである。たとひ形に表れ言に發せずとも、かくの如き心を有する靈魂はすでに祈り續けて居る。念々たえず祈る祈禱を行つて居るのである。

たとへば偕老同穴のちぎり深き夫婦がともに棲むならば、兩人は實に一體である。心と心とが行

き通つて居る。此れ求めて彼れ應じ、彼れ與へて此れ受くると云ふ交渉が精神の上に於て、不言不語の間にも行はれて居る。夫婦と云つても決して、しやべり續けて居るのではない。沈黙の間にそれ／＼のつとめに従ひ、餘念なく見えるのである。しかしながらもし必要を生じ、機會を與へられるならば、その深き思を言語にも發し、他の形式にもこれを表すのである。聲に發しはしないが、生活をともにするの趣と氣分とはその家に満ちて居る。基督者の神に於けるまたかくの如くである。水道の水は鐵管を通じて家に行きわたり、その流れに少しの間斷も無い。しかし必ずしも外面、人の見えるところに流れては居らぬ。然るに、多くの人の飲料となり、火事の用心にもなるほどの多量の水が、こんこんと盡きることなくそこに通つて居るとは、よそ目に一寸想像の附かぬ事柄である。しかし栓を一つひねれば瀧の如く溢れて来る。祈もまたこれと同じやうなものである。心は念々間斷なく恩寵の御座に通うて、生命は基督者とその神との氣脈を通じて、互に相俟つて活動を續けて居る。しかしそれが何時も續けさまに聲を發し、言葉に表はれては居らぬ。しかしながらも機會さへあれば何の苦もなく、水道の給水同様、切なる祈の言となつて表はれる。さながら水道の栓をねぢるにも類して居るのである。

またこれを呼吸にも譬へることが出来る。呼吸に間斷があつては生命が保たぬ。たえず呼吸せねばならぬ。しかし時としては座をたつて、身體を伸ばし、戸外に出で、清い流に臨み、高嶺の新鮮なる空氣を求め、或は深呼吸などを行ふの必要もある。間斷なく呼吸するからといつて、換氣の方

法も不完全な窮屈な部屋に二六時中閉ぢこもつて執務に餘念なきが如きは、健全なる生命を保つ所以の道ではない。必ず肉體をそこなひ、精神をも傷つくるに至るであらう。あまりにぶしやうになりて、外出を好まず、たゞ垂れこめてのみ居らぬ様に注意し、克己精進、寒風をも冒し、高き山にもよち上り、雨にぬれ、汐をかぶることを厭はぬほどの氣概があつてこそ、健康と云ふものが保たれるのである。間斷なく呼吸して居ると云ふ事實のみに安心は出来ない。

心すでに誠の道にかなうて、信念に於て神と交渉を斷つことがなければ、これ正しく絶えず祈つて居ると云ふことに相當して居る。しかしそののみで安心は出来ぬ。しばしばその機會を見出して跪坐正念、ことばを整へ、聲を發して祈ることをせねばならぬ。長時間一室に執務するものが、しばしば心ゆくばかり充分に深呼吸を要すると一つことである。これが爲めにはイエスも「戸を閉ぢて」と言はれた如く、ことさらにいとまを作り、機會を設くべき必要があるであらう。克己精進、これを行ふことにせねばならぬ。努力が必要である。「なんちの名をよぶ者なく、みづから勵みて、汝によりすがる者なし」。(イザヤ書六四・七) 神に依りすがるの態度を持する、これ不斷の祈であるが、これを爲さんとほつするなれば、かくの如く「自ら勵まね」ばならぬ。御名を呼ぶことを忘れ、勵みて、依り頼むことをせず、祈禱の友とうとくなり、密室の祈を忘れ、長い間これをおくびにも形にも出さないときは、精神的に間斷なき祈も、恐らく漸くにして斷えだえになり、信仰の生命は、心もとなき状態ともなるであらう。故に黙々の間にも祈禱は斷ゆるものでないが、何時

も黙々であつては、はなはだ不利益である。それでは祈禱の精神が枯渇して廢滅に歸するの恐れがある。

「殊更に謙遜をよそほひ、御使を拜する者に汝の褒美を奪はるな。斯る者は見し所のものに基づき、肉の念に隨ひて徒らに誇り、首に屬くことを爲さるなり。全體は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神の育にて生長するなり」。(コロサイ書二・一八、一九)かくの如き人は影の本體にそふが如く節も維も相因り相聯なり、全體神に育てられて成長するのが祈禱の生活である。たえず祈らねばならぬ。しかるを「首に屬くことをせず」で、懶惰放縱、傲慢不遜、たゞ世心にかられて、靈魂、神と疎遠になり、努めて祈ることをなさざるに至らば、靈なる生命つひに滅亡するにきまつて居る。祈なき生活は首に屬かさる手足のうごめくが如きに過ぎぬ。

三

祈の効果に就いて疑ふ人もある。彼らは祈るとも何の甲斐かあらんと、しばしば問ふのである。これは祈をもつて、たゞ願ひごとに限るものと思ひひがむるから生じた疑惑である。人を愛し、これに誠をつくし、敬意を拂ひ、往訪音問の禮節を盡くすに當つて、その効果實益如何と専ら苦心するは、はなはだあさましきことである。たゞ何ものかを獲んとほつして爲すとあつては、事はすでに自家撞着であるのみならず、精神上何の價値をも見出し得ないのである。少しもこれを嬉しく思

ふことは出来ぬであらう。神に祈を爲すに於ても、たゞ與へられんことを期するからではない。また獻げんことを志すのである。讚美、感謝、懺悔などは、効果の有無にかゝつた話ではない。ただ真心をつくして、日光の中に花の咲く如く、神の前に思ひ續けて意中を盡くさんと欲するのが祈る人の心である。何ものかを獲べしと云ふ保證がなければ祈るまじと言ひはるが如きは愧づべきことである。人間の關係に於てすらさうであるから、神に對してはもとよりの事であらう。神の實在を信じ、その恩寵と威嚴とに感じ、己が身に深く省るところがあれば、祈はおのづから胸中に湧き、言外に溢れ來るのである。

しかし得るところあらんことを期して祈るのではなくとも、その効果は豫想以上に多大である。いはんやある事物の必要を感じ、しきりにこれを與へられんことを願ひ求むると云ふことも、たしかに祈の一部分に相違ない。かくの如く願ひ求むるも、その効果は期待し難いことであるか。願ひ事を爲すも爲さざるも、何らの相違を生じないのであるか。「正しき人の祈ははたらきて大なる力あり」。(ヤコブ書五・一六)「求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたゞく者は開かるゝなり。汝等のうち、誰かそのパンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや」。(マタイ傳七・七—一)親に請ひ、友に求め、彼らに訴へて、その効果を見るこ

との出来る世界にあつて、聖にして愛に満てる全能の天父に祈ることのみ獨り無効なりと認むべき道理はあるまい。神は誠をこめた祈りに聽かれるであらう。聽かれると云ふことは必ずしも求むるが如くなることを意味せぬ。神の聖聽に達し、祈るものの状態に深くその聖意を留めらるればもつて足りるのである。願ひし如くなるのはもとより祈を聽かれたのである。しかしかくならずともすべての事はすでに恩寵深くかしこき天の父に聽え上げたのであるから、これに一任して心を安んずることが出来る。

祈は神に聽かるゝものである。その効果必ずひゞきの音に應ずる如くである。感能あきらかである。かくの如く祈は求むるものを獲るの力であるが、その効果はこゝに止まらぬ。祈るものゝ人格の上に、その精神状態に、効果を及ぼすこともはなはだ深く、はなはだ多大である。かくの如く祈の効果は兩様に解釋せられる。求むるものを與へらるゝてふ効果と、求むる人の人格に及ぼす感化とがすなはちそれである。前者は祈の重大なる要素で、確實なることであるが、その方は他の場合に譲つてこゝに詳述せぬこととし、暫く後者について一言したる。

祈をさゝげ、ことにその要素を列ね、かつ讚美し、感謝し、懺悔し、志を表明し、至誠を抽んで、ねぎ求むるときは、その結果として、眞に謙遜の人となることが出来る。謙遜は美德である。これに由らなければ學問も出来ぬ。自然の法則を尊び、その力に頼ることを心がけ、そのはたらきに従ふことを喜ぶのでなければ大なる工業は發達せぬ。自らのみ、あへて無理を行ふときは必ず

失敗する。例すればドイツのカイゼルの如きを見よ、自らのんで傍若無人、あたかも天に神も無きが如く振るまうたればこそ、今回の如き悲運におち入つたのである。驕るもの久しからず、春の夜の夢の如し。彼をしてキリストの名に於て眞にいつも祈るものであらしめたならば、かくは無かつたであらう。實に矯矯珍木嶺、得無金丸懼、美服患人指、高明逼神惡。荒野に於けるイエスのかゝられた誘惑も、その謙遜の徳に襲撃を受けて見事これを撃退せられたる實例である。「神は高ぶる者を拒ぎ、謙だる者に恩恵を與へ給ふ」、(ヤコブ書四・六)「我らはキリストにより、神に對して斯る確信あり。されど己は何事をも自ら定むるに足らず、定むるに足るは神によるなり」。(コリント後書三・四、五)朝な夕な祈を怠らないのはこの心の表現である。いはゆる謙に居て益を受くるの精神状態になつて居る。この心がすでに人の美德であるのみならず、その成功の秘訣、力を得、祝福を全うする道がこゝにある。「幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり、幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん」。(マタイ傳五・三一五)これ屈すれば伸ぶるてふ理にもかなふ。靈と眞とを以て神を拜し、つゝしんで聽き、靜かに命を待ち、みやつかへの姿勢の常に整ひ居るものは、上よりの力を授けられ、その勢の範圍を擴められて、祝福に満たされざるを得ぬであらう。しかしてこれらはみな祈より來るのである。その効果はこゝに至つてはなはだ著明である。

この外、祈をなすものが自己を批評するに於て、おのづから誠實を旨とし、公平なる判断を下す

ことの出来るも、その効果の一つである。居は心を移し、交は品性に驚くべき變化を來す。常に祈をなす者の精神状態が高尙になつて、何となし威嚴を増すに至るは自然の順序である。デエリンガルは基督教の古代史を研究してこれに精通した人であるが、その結論の一に曰く、「初代の基督者を見るに身分低きもの多く、たいてい卑しき階級に屬するものであつたのにも拘らず、その品格は思ひの外に高く、文にして雅なる氣象をそなへて居るやうに見える理由は、彼らが祈ることを重んじ、常にこれに従事した結果であらう」と。

祈のために人生の環境を一新し、逆も順に受け、貧苦のうちに祝福を見出し、患難にも喜び、弱きにも強く、常に主の恩寵、我に足りて餘りあるを経験することは、祈るものでなければ味ひ難い幸福である。

祈つてやはらぎを得、狂はんとする意馬心猿をつなぎ留めて平靜の態度を持することの出来るのも、祈禱の効果である。かくの如く算へ來れば、祈の主觀的利益は枚擧にいとま無きほどであらう。

(一九一八年一〇月)

傳道叢書刊行のことば

此の小叢書は、植村正久先生の祖國に對して懷かれたさかんな福音宣教の志を傳へんが爲に、植村會(先生を記念し、その志をつがさんが爲に組織せられてゐる會)により企畫せられ、株式會社新教出版社の協力を得て刊行するものである。

植村先生は一八五八年(安政四年)江戸芝露月町の旗本邸に人となり、維新の改革により境遇激變し、横濱に移り住み赤貧のうち立志を立て、宣教師ブラウンの塾に入り、其處に於て英語を學ぶ間にイエス・キリストの福音に召され、つひにその生涯を、これが宣教に獻ぐるに至つた。

先生は牧師として下谷教會に聘せられたが、後、一番町教會(富士見町教會の前身)を設立し、その富士見町教會を根據として臺灣、朝鮮、滿洲、中國に遠宣教者としての足跡を印した。その一方東京神學社神學校を起して宣教者の養成に力を致すとともに、著述の他に福音新報等の定期刊行物を起して文書傳道に精勵された。而して其の活動期は實に半世紀に亘るものがあつた。

先生は、其間、時代の急潮に押流されることなく、毅然として正統信仰を堅持し、福音の眞理の把握と扶植とに精進せられ、明治、大正の兩代を通じての一大精神指導者たる面目を全うされたのである。一九二五年(大正一四年)死去。

先生の學問は古今、東西に亘り、而もその詩人的天分が豊かであつたことは、その福音

194
U42
3

植村傳道叢書 5

昭和二十二年十月二十日 初版印刷
昭和二十二年十月三十日 初版發行

「新」 定價 十八圓

著者 植村正久
著作權者 植村正久
發行所 東京千代田區飯田町二ノ七
發行所 長崎次郎
東京都港區芝南佐久間町一ノ五三
印刷所 笠井朝義

發行所 株式會社 新教出版社
東京千代田區飯田町二ノ七
會員番號 A-119022番
振替番號 東京九九九一番

笠井印刷・中野製本

7580

的信仰とともに數萬頁にのぼる遺稿（一部は植村全集として刊行せられ居る）に於て見るべく、かゝる小冊子にあつては僅かにその片鱗を窺はしめるにすぎない。

なほ此の小叢書にあつては、刊行の趣旨・目的に應ずる爲に、引用聖書章句、使用漢字、送り假名、用語、文體等については幾分の變更を加へたものもあることを特に断つておきたい。その原形について知られたき方は、既刊行の全集について見られたい。

一九四七年

植村會

刊行書目

- 1 神
- 2 降誕と復活
- 3 十字架
- 4 基督教生活
- 5 祈
- 6 教會
- 7 永生
- 8 求道者に寄す
- 9 彼らは如何にして導かれたるか
- 10 基督者と社會

終

